

ふくしま道徳教育資料集

【高等学校版】



福島県教育委員会

この本を手にとったみなさんへ

かけがえのない命をもつみなさん。

家族や友達、先生、

さらに多くの人とのつながりの中で、

みなさんは、生きています。

ここ福島で、今、時を過ごしているみなさんは、

この本から何を受けとめるでしょうか。

この本を読んで感じたことや、

そこから生まれた問い、思いを、

話し合ってみましょう。

今を共に生きる人と話し合うことで、

見えてくるものが、きっとあることでしょう。



福島県教育庁義務教育課長

佐藤 秀美



目次

(1)	つむぐ命	4
(2)	生きている 生きてゆく	12
(3)	長崎からの手紙	14
(4)	チェーンメール	20
(5)	福島に生まれて	22
(6)	もう一人の八重 〈日本のマザーテレサ「井深八重」〉	30
(7)	私の明日 ^{あした}	36
(8)	道 ^{みち} 標 ^{しるべ}	40
(9)	三十年後の桜	44
(10)	野馬追に懸ける思い	48
(11)	ふりこ	54
(12)	十代のしめくくり	60
(13)	がんばっぺな	66
	「モラル・エッセイ」コンテスト作品集	73



ふくしま道徳教育資料集

【高等学校版】



つむぐ命

東日本大震災以降、福島県警察は、災害現場における最前線で、住民の避難誘導活動や遺体の搜索活動、避難区域境界における検問や仮設住宅等に身を寄せる方々への訪問活動などを行ってきた。それぞれの立場で震災に立ち向かってきた記録を一冊の手記にまとめたものがある。これは、警察官や、その家族の思いを綴った手記の一部である。

「放射性物質対処班での勤務」(当時 警備部 K・T 二十代)より

〈前略〉……震災から一週間余りが経ち、私は県警本部警備本部内に新設された放射性物質対処班での任務が課された。

当班の主な任務は

- ・警察職員の被ばく低減対策(被ばく管理・教養)に関する企画指導
- ・関係機関からの情報収集、連絡調整
- ・安全管理サポート班の運用計画の策定

等多岐に渡る。

これまで、放射線に関する基礎知識があった警察官はおそらくほとんどいなかったと思う。かくいう私も放射線に関する知識は皆無に等しく、初めて耳にする単位等に戸惑う日々が続いた。当初、あらゆる問い合わせが殺到し、受話器が鳴るたびにドキっとした。





しかし、今次大震災^①における警察活動の最大の障害が原発事故による放射性物質の大量放出であることから、現場で活動する警察官の不安感を払拭^{ふっしょく}することがその一番の任務だと考え、今日まで何とか踏ん張ってきた。

三月末、X線作業主任者の資格を有する者を班長に指定し、安全管理サポート班が編成された。

福島県警察が他の機関に先立ち、二十キロメートル圏内・十キロメートル圏内の捜索に従事することができたのも、「縁の下の力持ち」である彼らの活躍によるところが大きかったと思う。激務にも嫌な顔一つせず現場に向かって行った彼らを頼もしく、そして一緒に勤務できたことを誇りに思う。

現在、外に出れば多くの県外部隊の車両とすれ違う。全国警察が一丸となって福島県を支えている。本当にありがたいと、県外部隊を見かける度に胸が熱くなる。

これから、福島県警は様々な課題と向き合って行かなければならぬ
と思う。

「お陰様で」の気持ちを忘れずに、微力ながらも私も一翼^{いちよく}を担^{たん}える
よう真摯^{しんし}に自己の任務を遂行していく覚悟である。

「技術職としての震災対応」

（当時）科学捜査研究所 I・T 二十代）より

〈前略〉……震災から半月ほど経った頃から、私の業務に死者データベースの登録・管理が加わり、五月頃からは、その仕事に専従^{せんじゆう}することとなった。ここでは検視の結果を死者データベースに登録し、求めに応じて必要な統計を捜査面に還元するのが主な仕事であった。「君

① このたび。今回。

のパソコン操作の能力が本部に評価されたのだから精一杯やってきなさい。」と激励の言葉を受け、その意味するところを噛み締めながら、およそ二か月にわたる本部での業務に就いた。

遺体の特徴、着衣や所持品の情報、身元が判明すれば氏名や住所を入力するのだが、まだ幼い犠牲者を登録するケースもあり、とても心が痛んだ。そんな中で自分にできるのは、データを正確に登録して一日も早く遺族の元へお返しすることだと思い、ひたすらに入力を続けた。

五月に入った頃、これまでの仕事に加えて県警ホームページ掲載用の身元不明遺体リストの作成に携たずわることとなった。前述の死者データベースから身元不明遺体を抽出ちゆうしゅつして、遺品の写真を添付するまでの操作を自動化した程度のもので、手探りでこしらえたプログラムであった。当初は動作不良が多く、ちゃんと運用できるか心配しながらも、関係担当者との打合せを重ねて本運用にまでこぎ着けた。

後日、慣れないマウスを握りながら身元不明遺体リストで家族を捜すおばあさんの様子が、テレビで放映されていた。『家族を捜し出したい、でもできれば生きていてほしい。』というおばあさんの言葉から、リストを活用してもらえた喜びと、遺体で発見されたことを遺族に伝える心苦しさが交じった、複雑な感覚を覚えた。

現在は、この身元不明遺体リストをベースとして東北三県の遺体リストを組み合わせた『つむぎプロジェクト』で統合的な検索が可能になっているということである。遺体を捜す遺族に向けて、心の復興への手がかりになればと思う。……〈後略〉

「県民の安心のために」(当時) 高速道路交通警察隊 K・T 三十代)より

〈前略〉……外に出ると、道路のアスファルトは大きくうねりをあげ大きな亀裂きれつが生じ、周囲の家屋の塀や瓦が次々と落下していた。

今まで経験したことはない揺れと、悲惨な光景を見るや否や、参集しなければとふと我に返り勤務先の高速隊郡山分駐隊へと向かったのである。

分駐隊へ向かう途中、全ての信号機は滅灯^{めつとう}し、道路上にも壊れた塀や瓦が散乱し通行できない状態であった為、妨げになっている物をどかしながらやつの思いで辿り着いたのを覚えている。

分駐隊に到着すると私は直ぐさま磐越道の各ICの閉鎖、通行止めと通行車両の排除の^②下命^{かめい}を受けた。

本線に入ると地震の影響で、路肩や車線上のいたる所に亀裂や陥落^{かんらく}・隆起^{りゅうき}箇所が点在し、到底高速進行は出来ない状態であった。

被害が大きい箇所では、車一台すらも通行出来ないほどの亀裂があり、本線上の全ての車両を排除しなければいつ大事故が起こってもおかしくない状態であったのである。

二次災害が起こる前に、いち早く通行車両に危険を知らせ、高速道路から出てもらわなければという逸^{はや}る気持ちで現場に急行している途中、反対車線に立ち往生している車列を認めた。

この車列は道路の大きな亀裂により通行できないで停止していたもので、その列は何キロメートルにも及んでいた。車両の運転者達は車両から降りて、怒鳴り散らしている者や取り乱している者もあり、反対車線の私たちのパトカーを見つめるや否や「何とかしろよ」「早く通してくれ」と大声をあげた。誰もが経験したことのない状況で現場は混乱していたのである。

現場は、橋上^{きょうじょう}でもあり更なる余震により崩れる危険性もあったことから、私達は道路管理者との協議の上、中央分離帯のガードレールを取り壊し、反対車線へUターンさせ避難させる措置を講じるこ



② 命令を下すこと。
その命令。



とにした。

私達は緊急工事が終了するまで、本線に取り残された方に少しでも落ち着いてもらえるよう一台一台声を掛け続けたが、話を聞き入れない者や取り乱したままの運転者がほとんどだった。

しかし、ようやく中央分離帯を取り壊す工事が終了し車両が動き始めた時、どの運転者も道路管理者や警察に対し^{ねきら}労いの言葉を掛けてくれたのだ。

この労いの言葉は、動揺を隠せないでいた私にとって大きな励みとなり、自分自身を奮い立たせるきっかけとなった。

警察官である以上、私達はどんな状況でも冷静沈着に物事を判断し、対応していかなければならず、警察官が不安を隠せないで対応すればそれは相手にも伝わり、警察の任務を果たせていないのと同じである。

私は運転者に声を掛けていた時、自分自身が不安だったため、その気持ちが相手に伝わってしまったのだと思った。あの時もっと警察官としての職責を自覚し、不安でたまらない運転者一人一人に声を掛けていれば、少しは違っていたのかもしれない。

現在も避難されている方や、不安な日々を送っている方が多数いる中、警察に求められているものは多岐^{たき}にわたる。

今回の震災は私にとって、警察の立場、役割について今一度考え直すきっかけとなり、原点に戻らせてくれた。

震災を通して感じたことや学んだことを無駄にしないようしっかりと胸に受けとめ、県民のための警察官と

して少しでも期待に応えられるよう努力していきたい。

「震災で気づいたこと」(K・M 小学五年生)より

〈前略〉……両親が警察官だったことは分かっていましたが、今まで実感はありませんでした。

「悪い人を捕まえたり、パトロールしたり、人の安全を守ったり、すごいのかな……。」
ぐらいしか思っていませんでした。

しかし、この震災で、いろんなことが分かりました。

○津波から人々を守るため、自ら出動し、巻き込まれた警察官

○危険で、人の入ることのできない場所に行かなければならない警察官

○行方不明の人たちを、必死に探す警察官

○みんなのために、命をかける警察官

こんな大変な仕事だとは分かっていませんでした。

父は以前、

「お父さんは、もしかしたら、明日、悪い人にやられて、死んじゃうかもしれないんだよ。そのかくごはあるんだよ。」

と言っていました。それは冗談ではなかったのです。

この時私は、

「かくごってなあに。それだったら、私だって、明日交通事故で死んじゃうかもよ。」

と返していましたが、今思えば、とても失礼だったと反省しています。でも父は、そんな危険な立場にあるにもかかわらず、私達のことをいつも心配してくれているのです。

会津ではとてもよい生活ができました。水は止まっていなかったし、電気はつくし温かくおいしいご飯が食べられたので、福島に比べればすごく幸せでした。それでも、マスクは絶対着けて、毎日テレビの端でくる放射線量を調べてノートに記入するのが日課でした。

何日かに一回くらいは、父や母から電話がきましたが、妹たちは、電話では聞こえないように泣いていました。一番下の妹は寝る時、たまに、

「ママに会いたい。ママと寝たいよ。」

と祖母に泣きついたりしていましたが、祖母は、

「今、お父さんとお母さんは、みんなが早く、安全に普通に暮らせるように、がんばっているんだよ。」と頭をなでていました。

普通がいかに大切ですばらしいか、しみじみと分かりました。

そして、学校が始まるということで、四月の始めに福島に戻り、お父さんも五月に福島に帰ってきました。

福島の生活は、だんだんと戻ってきましたが、放射線や、風評被害などで、たくさん問題をかかえています。家に帰りたくても帰れない人がたくさんいます。

今回の震災がなかったら、人と人が助け合うことや、普通の暮らしがいかに大切か、物のありがたさなど、分からなかったかもしれません。また、両親の仕事も理解できなかったかもしれません。

お父さんお母さんが、仕事に行く時や帰ってきた時は、感謝をこめて大きい声で言いたいです。

「行ってらっしゃい。」



「お帰りなさい。」

今回まとめられた手記の最後には、平成二十四年度に異動した松本県警本部長宛てに、福島県の子どもより送られた手紙が紹介されている。

松本本部長様へ

この1年間をふり返って

大きな地震があり津波があり、その影響で原発事故があり、多くの人が心を痛め、それが今もまだいえることなく続いている人が、たくさんいます。

当時、僕たち、普通の人ができることは、ほんの少力で、自分の力のなさや存在の小ささを感じた人はたくさんいます。

海の近くで生きてきた人たちを助け、心を支えるのに、警察の存在はとても大きかったと思います。

福島をはじめ全国から心を痛めて助けを求めている人のために、頑張ってもらっています。毎日毎日多くの車両と警察官が朝早くから被災地に向かっています。僕たちは、手を振って応援しています。

どれだけの人が助けられ、心を救われ、明日への希望につなげることができたのでしょうか。

帰りは、夜遅くに帰ってきます。「お疲れ様でした」と声をかけると、「いつもありがとう」「ただいま」「かぜひかないでね」など無線で声を返してくれました。

心も体もすごく疲れているのに、元気に声をかけてくれました。

警察官はとても強くて、それに優しいです。そんな警察官に、僕は、なるのが夢になりました。

僕はサッカーのスポ少に入り、やっています。僕のチームは試合で勝つことが多いです。チームのみんなが1つに向かって頑張っています。キャプテンをはじめ、みんなで声をかけて努力しています。

かんとくは、常に厳しいし、練習はきついけど、いつも僕たち一人一人を見て、アドバイスをしてくれます。勝った時、プレーがうまくいった時には、ほめてくれます。だから、次も勝ちたいと思えます。

かんとくは、いろいろなことを教えてくれます。あいさつの大切さ、気配りの大切さ、努力の大切さ、感謝の大切さ。だから、僕のチームはとても強いです。福島の警察もとても強いと思います。

松本本部長をかんとくに、キャプテン、チームのみんなが福島のために、勝つために頑張っているからです。

警戒区域という、人が立ち入ることのできない所を守ってくれています。

いつか帰れるその日のために、福島のためにありがとうございました。

そして、松本本部長のチームはもっともっと強くなっていくと思います。ずっと応援しています。そして、そのチームに僕も必ず入ります。警察庁にいても頑張ってください。

生きている 生きてゆく

東日本大震災後、約二五〇〇人の避難者を受け入れたビッグパレットふくしま。富岡町と川内村の人々が六か月近い避難生活を送りました。避難所内は悲しみと苦しみの声であふれていました。しかし、人々が力を合わせて避難所を一つのコミュニティにつくりあげていく中で、少しずつ、感謝と喜びのつぶやきが生まれてきました。人と人が出会って生まれたコミュニティ。困難を乗り越えていく人々のつぶやきは、私たちに「生きてゆく」勇気を与えてくれます。

初めは涙が出た。
ごはんを食べてても
ポロポロ落ちてきて、
なんで私だけと思ってた。
夫が心配して
優しい言葉をかけてくれた。
(六十代・女)



ああ温泉の香りいいねえ。
こうやって話聞いてもらうと
心が楽になる。
私はいつも相手のテンションに
合わせるようにしているの。
元気のある人には元気に。
気持ち下がっている人には
私も合わせてね。
(五十代・女)



今みたいに笑うことって
ないんだよな。
泣くことはあっても。
今後どうすっぺと思うとな。
笑うっていうのはいいことだ。
この足湯って、
話すことが大事なんだな。
こうやって話して笑うことで
心がすーっと軽くなるよ。
(五十代・男)

毎日こうやって親切にしてもらって、
本当にありがたい。
郡山の人たちには本当に感謝している。
音楽聴いたり、友だちとしゃべったり、
花植えたり、暇なしなんだ。
本当にそれだけで幸せなんだ。
昨日の夜は足が痛かったけど、
こうやって温かいと痛みがとれる。
本当にありがとう。名前、忘れないからね。

(八十代・女)



ホント、「諦めない」って大事だと思うよ。
若い人は可能性しかないわ。
何でもできるもの。しがらみがないから。
今から、新幹線に乗って、東京行って、
アメリカにだっていけるでしょ？
あなたも若いんだから、
頑張って！

(六十代・女)



振り返って、
良かったと思える人生に
しなくてはいけないよ。
退職するまで
いろいろあったけど、
いい人生だったって、
かみさんと言ってるんだ。

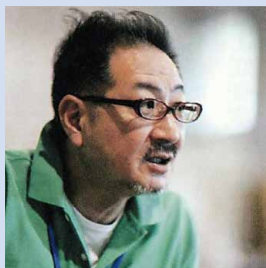
(六十代・男)



『生きている 生きてゆく』（ビッグパレットふくしま避難所記）刊行委員会より抜粋して掲載しています。
※つぶやきは、足湯から生まれました。その様々なつぶやきが避難所の運営に生かされました。
※本文と写真は、直接の関係はなく、したがって被写体の方の発言ではありません。

ビッグパレットふくしま避難所の中に生まれた支援の拠点「おだがいさまセンター」は、「ふるさと」を遠く離れて避難をしている住民の命を守るため、人々の心がつながったところに生まれる「コミュニティ」をもつ一度よみがえらせるため、今もその活動を続けています。住民の中には、避難所をつながりを保ちながら「サロン」などの自主的な運営活動をおとして、希望を見出し歩き始めている方々もいます。困難な中であっても、「ふるさと」をあきらめない、それが一人一人の命を輝かせることにつながると思うのです。

元ビッグパレットふくしま避難所県庁運営支援チーム 天野 和彦



長崎からの手紙

「母に最後のよい思い出をつくっていただきありがとうございます。ありがとうございました。」

手紙はそう締めくくられていた。恵美子さんの死を知らせてくれた息子さんの手紙は、今も私たちの心を支え続けている。

二〇一〇年十月 出会い・「相思樹の歌（別れの曲）」

私たち、郡山商業高等学校二年生は、長崎平和公園の平和祈念像の前にいた。高校生活の最大のイベント、修学旅行で長崎を訪れ、平和を祈る歌を歌うのだ。曲は太田博作詩「相思樹の歌（別れの曲）」である。

微笑みて 吾等おくらん

すぎし日の 思い出秘めし

澄みまさる 明るきまみよ

すこやかに 幸多かれと

幸多かれと

「相思樹の歌」の作詞者太田博さんは、郡山商業高等学校の同窓生である。太平洋戦争末期、地上戦により多くの住民が犠牲になった沖縄に、一九四四年（昭和十九年）陸軍少尉として赴任し、米軍との決戦を前にして、動員されたひめゆり学徒隊を傘下に高射砲隊の陣地構築の指揮をとった。①そのことが機縁となり、ひめゆり学徒隊との間に交流が生まれ、卒業を祝う餞の詩として「相思樹の歌」を贈った。相思樹とは、ひめゆり学徒隊が通った学校の正門に至る一本道の両側に植えられていた樹木の名前で、この詩には曲がつけられ、戦場で過酷な運命を強いられる中、学徒隊の女子生徒によって歌われた。

沖縄戦では、ひめゆり学徒も、沖縄の住民も、そして太田博さんも亡くなった。しかし、「相思樹の歌」は、生き残ったひめゆり学徒隊の方々に歌い継がれるとともに、鎮魂歌ちんこんかとして、沖縄のひめゆり平和祈念館にも流れ、今も生き続けている。

そして、郡山商業高等学校では、先輩の功績をたたえて、平和を祈る歌として在校生に歌い継がれ、私たちも、修学旅行先の長崎で、原爆で亡くなられた方のご冥福と世界の平和を祈り、大きな声で、そして心を込めて「相思樹の歌」を歌ったのだ。

恵美子さんとの出会いは、その時訪れていた。

二〇一一年一月 長崎からの手紙



寒中お見舞い申し上げます。学校とはおめもじのない老女でございませう。②
昨年こぞの十月下旬だったと

① 航空機を撃ち落とすための大砲。

② お目にかかることをいう女性語。手紙文などに用いる。

思いますが郡山商業高等学校生と出会いがあり、一筆御礼を申し上げたく筆をとりました。私も、被爆者の一人で、ただいま一人で生活しております。外出も一人では出来ませんので、長男夫婦が時折、北九州から来て、私を歩かせております。やっと車から降り、平和公園へ歩行器でついた時の出会いです。高校生の後ろ姿を見つけました。

まもなく、大合唱がありました。その歌声が、六十五年前のあの惨事と交差して涙が溢れ、今までにないこのころ温まる感動を受けました。その時の私の感動でございます。

鎮魂の詩 声天へ 身にぞ入む

(恵美子 九十四歳)

像の前には大きい花輪、遠方からの学生さんだったことを知りました。ありがたき奉納に一礼しての帰路でした。いまままでにない感動ありがとう。皆様の御健闘を長崎の空よりお祈りいたします。

あの時歌われた歌詞を心の支えにしたいので、よろしかったら教えてください。

私たちは、思いがけない手紙に驚いた。私たちの歌を聴いてくださった方がいる。私たちの思いを受け止めてくださった人がいる。それは、合唱を介して私たちと恵美子さんが、福島と長崎がつながった瞬間だった。

私たちがあの時に歌った詩は、先輩である太田博さんがひめゆり学徒隊に、卒業後もお互いに助け合い、協力し合ってたたくましく生きていってほしいと願って贈ったものであること、恵美子さんにこれからもずっとお元気でいていただきたいこと、そんな思いを込めて同級生に呼びかけ一人一人が手紙を書くことにした。もちろん、太田博さんの詩集「太田博遺稿集」と「相思樹の歌」のCDを添えて……。恵美子さんに送った「太田博遺稿



集」は、郡山商業高等学校の創立九十周年を記念し、その年の十月、同窓会が発行したばかりのものだった。

二〇一二年二月 結ばれていた絆

前略 お手紙ありがとうございました。

皆様に喜ばれましたこと、うれしい限りです。三十年前になりましたでしょうか、私と主人は摩文仁の丘^③へ慰霊の旅に出ました。丘には全国の県の石で碑が建っております。いささかの花と水、線香を供えてお参り致しました。丘から見る大海原は心なしか涙をさそうものです。今になってみると、太田少尉様とはその日からなにかつながりがあったように思われます。

私の長兄は日中戦争の時、山西省で、戦死しております。昭和十三年八月二十三日、二十八歳でした。黄砂が降ってきますと、兄が踏みしめた土ではないかとなつかしく思うことがあります。主人は十六年に中国北部に出征しましたが、負傷の身で帰りました。造船会社に復帰して一年後に原爆に遭いましたが、私たちは命だけは助かりました。今では平和を祈るだけでございます。私も三十年前に相思樹を見ているのでしょうか。今おぼろげに思い出しております。九年前に主人を亡くしました。皆様からのお手紙を話しかける様に読んできかせました。喜んでいらっしゃるようでした。

早速CDを聴かせていただきました。私の九十四歳はなんと素晴らしい年だったと喜んでおります。孫よりも若い友達ができたことを喜んでおります。皆様の手紙は私の宝でございます。

二〇一二年三月十一日、午後二時四十六分。東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が発生した。この

③ 沖縄戦最後の激戦地で沖縄県糸満市にある。現在は平和祈念公園となり、各県の慰霊碑が並ぶ。

年の十一月、私たちは、恵美子さんの息子さんからの手紙を受け取った。

二〇一一年十一月 別れ

拝啓 急に寒さが厳しくなり、九州もいっぺんに冬らしくなりましたがいかがお過ごしでしょうか。私は昨年平和公園で修学旅行の子ども達の歌声に感動していた恵美子の歩行器を押していた息子です。残念なことです。今月十九日、恵美子、九十四歳十か月で安らかに旅立ちました。

まだしっかりした会話ができる今月上旬、沢山土産話をしたいのにお父さんはまだ迎えにきならんとよ。あの郡山の詩の本を棺ひつぎに入れておいてね、と念押ししていました。

原発事故のあと、TVニュースを見て、あの子達はどうしているかね、元気かね、もう一度あの歌を聴きたいね、と度々話していました。自分の被爆体験を思い出しながら、ニュースを見ていたのではと思っています。

母も私も、爆心地から三キロメートルのところまで暮らしていました。直接の放射能汚染、直後の原水雲による黒い雨、その雨水を集めた水道水、爆心地周辺の芋が主食でした。当時のデータは何もありません。今のレベルでどのくらいの放射能に汚染されたのでしょうか。直後の一か月は真っ黒い下痢便等、影響は多々あったと思いますが、医療設備もない当時の長崎で生き延び得たのは、人がもっている自然治癒力のおかげだと思っています。母は九十四歳まで元気でしたし、私は七十歳までこれからです。人は逆境を乗り越えるすばらしい治癒力があると信じています。

これから更に厳しさが増してくることでしょう。またどんなことが起こるか予測もつきませんが、

それらをはねかえして強く羽ばたいて欲しいと願っています。

母に最後の良い思い出をつくって頂きありがとうございます。皆様のご健康を心から願っています。

私たちは言葉が出なかった。恵美子さん、こちらこそ、ありがとうございます。どうぞ安らかにお眠りください。私たちはしっかりと生きていきますから。

沖繩戦で失われた命、長崎の原爆で失われた命、東日本大震災で失われた命、恵美子さんの命、そして恵美子さんが気にかけてくださった私達の命、それらすべての命を、ひとりひとりの心に刻んで。

※ひめゆり学徒隊

第二次世界大戦末期の一九四五年四月、沖繩にアメリカ軍が上陸し熾烈な地上戦が展開され、当時沖繩にあった二十一の学校から生徒達が動員され戦場に送られた。そのうち沖繩師範学校女子部、沖繩県立第一高等女学校から陸軍病院に動員された生徒・教師たちを戦後、「ひめゆり学徒隊」と呼ぶようになった。学徒たちは、弾の飛びかう戦場で、負傷兵の看護、水くみ、食糧の運搬、伝令、死体埋葬等の仕事を行った。生徒二二二名、教師十八名のうち、一三六名が戦場で命を落としたが、その多くは六月十八日の「解散命令」以降であった。

〔教材作成委員会〕作成

チエーンメール

突然リビングの照明がついた。震災発生時から続いていた停電が、三日ぶりに復旧したのである。僕の家では、ロウソクやキャンドゥ用のランタンの明かりを使って食事をつくろうと、ペットボトルの水と買い置きのレストラン食品を出してきて、夕食の準備をしている最中だった。

「ノブ、テレビつけて。」

姉に言われて僕は急いでテレビをつけた。地震や津波の映像とともに、福島第一原子力発電所が爆発した映像が突然目に飛び込んできた。

僕は、ラジオや新聞で断片的に情報を得ていたものの、自分の中に一気に情報が入ってきて混乱した。

「これからどうなってしまうのだろうか。」

今まで味わったことのない感覚に僕は襲われていた。急いで自分の部屋に戻ると、パソコンを立ち上げて僕はメールをチェックした。受信トレイを見ると、震災直後から携帯電話などで安否を確認するメールが、学校の友人などから送られてきていた。

その中に、親友のヤスシからのメールがあった。

「原発事故からの被害を少しでも少なくするためのメールです。福島第一原子力発電所の事故の影響で、大量の放射性物質が拡散しています。今日以降の雨には絶対にぬれないでください。少しでも多くの人にこのメールを送ってあげてください。」

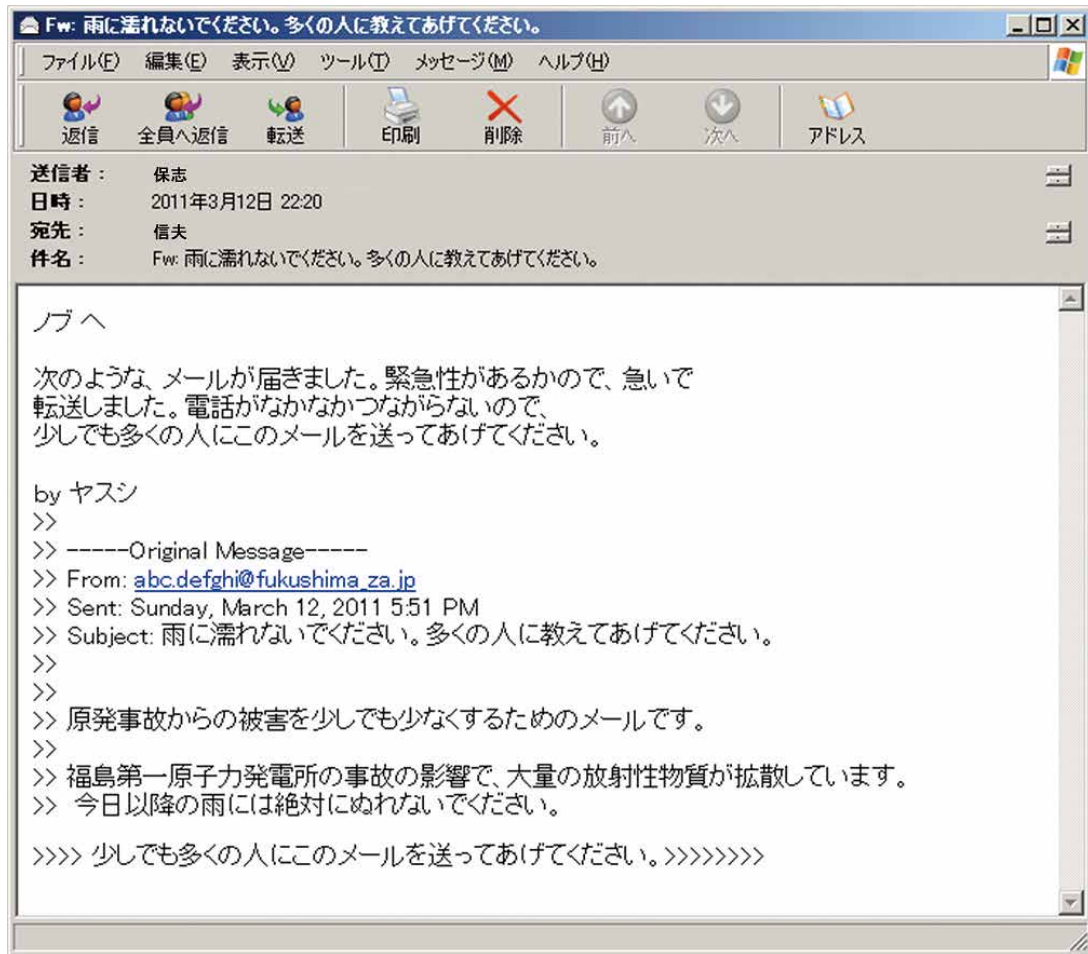
僕は、先ほど見たテレビの映像を思い出し、夢中で部活の仲間にヤスシのメールを転送した。

母や姉にも教えずにはと、急いでリビングに戻ると、二人がテレビを見ながら深刻な顔をして話していた。

「チエーンメールで、ずいぶんとデマが流れているんですって。」

僕は、耳を疑った。そして、しばらく動けなかった。

〔「教材作成委員会」作成〕



東日本大震災時の情報通信の状況

地上テレビ放送の状況の例

東北6県を含む全11県^{ていは}で停波が確認

最大時120か所（損壊2か所、停電118か所）

NHKでは緊急地震速報につづき、総合テレビをはじめ、教育テレビ、ラジオ第1など全8波で、地震発生の2分後より災害報道を開始した。

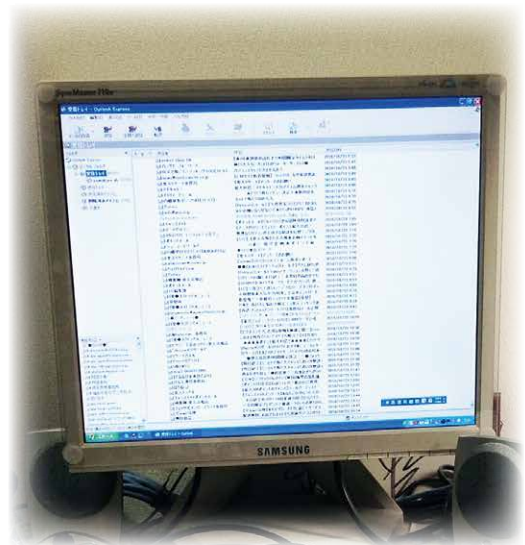
総合テレビ 約254時間放送

【地震発生から3月22日までの12日間に放送された震災関連放送】

※停波…電波の送信を止めること。

通信手段確保に向けた取組の例

- ① 災害用伝言サービスの提供
- ② 特設公衆電話の設置等
- ③ 衛星携帯電話の貸与
- ④ 移動通信機器の貸与
- ⑤ アマチュア無線の活用
- ⑥ 避難所への無料インターネット接続サービスの整備



参考資料「平成23年度版 情報通信白書
第1部 東日本大震災における情報通信の状況」

福島に生まれて

あの忌まわしい東日本大震災の発生から五か月が過ぎようとしていた平成二十三年八月四日。昼下がりの太陽がじりじりと照りつける中、真っ青な空にそびえ立つ會津風雅堂の大ホールでは、第三十五回全国高等学校総合文化祭「ふくしま総文」の総合開会式が行われていた。当日の最大の演目、「構成劇」には、県内の高校生約五百人が参加した。四十七年に一度巡ってくる総文の名物ステージだ。

普段は全く別々に活動している県内の演劇部、合唱部、オーケストラ、ダンス部、応援団の高校生たちが、リーダー役を務める実行委員の生徒とともに、この舞台のために力を結集させる。

構想から二年以上の歳月をかけて準備を進めていた構成劇『ほんとの空』の上演は郡山市民文化センターの被災により断念せざるを得なかった。そればかりか県内各地で部門大会を行う予定だった「ふくしま総文」そのものの開催も危うくなっていったのだ。しかし、可能性はほんのわずかに残されていた。震災直後の混乱の中、総文実行委員会事務局のFAXには続々と、ある「メッセージ」が寄せられていた。これまで総文の準備をしてきた県内の高校生約百名からの熱い言葉の数々だ。これらの言葉は演出家の手を経て、全く新しいシナリオ『ふくしまからのメッセージ』としてよみがえった。上演までの準備期間はわずか二か月。事前リハーサルも万全ではないまま、全国からのお客様を迎えて、まさしく「一発勝負」の舞台となった。

〈オープニング——オーケストラのチューニング音〉

〈ナビゲーター役高校生「庄助」に続き、舞台中央に「桃子」登場〉

桃子 庄助、何してんの？ 最後の点検、終わったんじゃないの？

庄助 あ、いや、俺さ、今日のこの日を迎えられるとは思わなかったな、なんて思ってた。

桃子 うん、私も。時間もないし、部活も出来ないし、福島で総文祭なんて、無理だっと思ってた。でも、

やれるんだね。

庄助 ここまで来たんだな。みんなのおかげだな。

桃子 庄助、オーブニング曲さ、「レクイエムも入れよう」って賛成してくれてありがとうね。

庄助 何だよ。今頃。

桃子 うん。今頃なんだけど、今言いたかったんだ。

三月十一日の震災から、私「今出来ることは何だろう」って考えるようになった。

震災で犠牲になった人々に、私たちが出来ることは祈ること。祈りを歌にして届けることかなってね。それまで準備してきたのと違っちゃっても、今のほんとの気持ちを大切にしたいって思うようになった。

庄助 俺は、祈るっていったら、黙って手をあわせることだと思っていたけど、皆で歌うってすげえよな。ほんとに天まで届きそうでもない。

桃子 さ、庄助、みんなに声かけてよ。あんたの第一声で始まるんだからさ。

庄助 よっしゃ！ みんな！ 準備いいかな？ 空と大地の魂に俺たちのメッセージを届けような！

〈オーケストラの演奏に、大合唱団の歌声がつづく。緞帳があがる〉

〈ステージ上には、キャンドルライトを抱いた演劇部の生徒たち〉

〈レクイエムが静かに終了すると、生徒は観客席に向かい、一人ずつ語り始める。〉

男子A 三月十一日金曜日、今まで誰も経験したことのない地震にみまわれた。家にいた人、学校に来ていた人、街に出ていた人、いろいろな場所で……。マグニチュード九……。連続で起こった震度六以上の地震。その時起きた大津波。たくさんの人が大切なものを一瞬で失った。津波で家族を失った。家も思い出も流された。

女子A 私は今、自分がどんな感情を持っているのか、あまり理解が出来ません。

普段だったら「楽しい」と感じることに、ためらいを感じてしまうのです。



私よりも「当たり前」の生活が出来ていない人たちがいるのに、「楽しい」と感じていいのか。また災害が起きて、この「楽しい」と思う感覚はなくなってしまうのではないか。今までどうやって自分の感情を理解してきたのだろう。

私は今、何を「思い」何を「感じ」ているのが、この地震が起きて以来、分からなくなりました。

男子B 三月十一日は、あなたにとつてどんな日ですか？ 朝御飯ちゃんとお食べましたか？ 学校に行きましたか？ おはようって言えましたか？ 大切な人に大好きと言えましたか？

女子B 今まであたりまえだと思っていたこと、それが失われてしまったことがくやしい。私たちの日常がこんなにも大切で、こんなにも脆くて、崩れ去ってしまう。私の最後の高校生活はこれからどうなるんだろう。そして私の好きなこの街はこれからどうなるんだろう。

男子C ライフラインを整備してくれている方々に感謝の気持ちがありました。

女子C 人に優しくしようと思いました。

女子D 震災を通して将来の夢が変わりました。私たちの愛する福島の役に立ちたいです。

男子D 世界中からの支援に涙が出ました。

男子E 家族がいる当たり前、家がある当たり前、大切な人がいる当たり前。その大切な人を守る当たり前。その人が笑っている当たり前。もし震災の日にこの「当たり前」たちが消えてしまおうと分かっていたら、もっとたくさん優しくできたんじゃないかな。私たちは当たり前のことに慣れすぎてしまっているのではないだろうか。

この震災をきっかけに「当たり前」のことが当たり前でできること」は、当たり前ではないんだと、たくさんの人々に気づいてほしい。

〈合唱曲『小さな空』(作詞/作曲 武満 徹)〉

〈生徒は、一人一人に問いかけるように話す。〉

女子E

私は福島県のいわき市というところに生まれ、そして住んでいます。海と山に挟まれた小さな町です。海に遊びに行ったり、おじいちゃんとおばあちゃんと山に山菜を採りに行ったり、おじいちゃんが海で採ってきた貝で味噌汁を作ったり、今はそれがすべて出来なくなりました。砂浜は黒く汚れ、海は汚染され、自然までも汚染されてしまいました。最近「ゴジラ」という存在が放射能と関係があるということを初めて知りました。

私たちはゴジラなのか？ と考えるようになりました。

「私たちはゴジラではありません」おかしなことを言っていますが、本気です。

私たちは、大好きな福島で、今、この時も生きてます。

伝えたいことはそれだけです。

男子F

原発はいまだ、不安なままである。放射能を浴びてでも自分の地元のためだと思って頑張り続けている人もいる。私はその人達に感謝したい。

勝手な情報にまどわされて、ただ周りの人と合わせて、結局何も知らないで毛嫌いするのは、かわいそうな人です。うまいこと言えないけど、とにかく知ることから始めなければならぬと思う。そして考えて、これからの事、自分は何が出来るとかなどを。

女子F

福島は世界の一部です。原発のあの事態、私は、全日本、全世界の人々が責任を負わなければならぬのではないかなと思います。みんなで考えてみんなで解決していききたいです。そのために本当のことを知りたいです。

〈合唱・弦楽合奏『つながり』 作詞/作曲 佐藤賢太郎〉※ふくしま総文委嘱作品



本当のことは見るのは　なんて難しいのだろう
本当のことを思うのは　なんて一人ぼっちなのだろう
本当のことを伝えるのは　なんて勇気がいるのだろう
そして嘘うその向むかいで　悲しい風に涙する人に
差し伸べられた手は　なんて温かいのだろう……

〈生徒たち、捜さがし物を求め動き出す。友と出会い歓喜かんきする。〉
〈やがて、いくつかのグループでモニュメントを作り始める。〉

女子G　あなたは今、何を感じて生きていますか。

大切なもの、笑顔、温かさ……たくさん消えました。
ですが、希望は残っています。

一人一人のその手で出来ることがきつとある。
きつとまたあの日に帰れるから、その日まで強く生きることを
忘れずに、負けないで今と向きあおう。福島はここから……

男子G　いつまでも後ろ向きに考えていても、事態は何も変わりません。

大人に任せるのではなく、一人一人が自分のすべきこと、今自分にできることをやり、一日でも早く「日常」に戻れるよう努力していくことが重要だと思えます。

“One for all and all for one.”　また皆で笑いあえる日はきつと来ると信じています。

〈全員、正面を向く〉

人はいつ死ぬか分からない。どんなにお世話になった人でも。あとでめいっぱい孝行こうぎょうしようと思っていた両親でも。だから私は思う。ありきたりだけど、今、この一瞬を、本気で生きていたい。そして目の前の人を、最大の努力をもって愛していたいと。



女子H 福島に「ほんとの空」を取り戻したいです。私たちはこれからも福島で生きていきます。自分の生まれたふるさと、自分が成長してきた大切な場所が元通りもととおになることを、心から願っています。願うだけではなく、行動……。おとなになる頃には絶対に、私たちが福島をよみがえらせます。

男子H 僕が避難していた三春町には、全国でも有名な「三春みはるの滝桜たきざくら」があります。

僕は、避難所の仲間と先生と、樹齢千年という桜を見に行きました。

滝桜は、今年も素晴らしい花を咲かせて、全国から集まった人たちはただ溜息ためいきをつくばかりでした。僕は福島に生まれ育って、こんなすごい桜があることを今まで知りませんでした。

千年も生き続けている桜の木は、毎年花を咲かせては散りながら、何を見てきたのかと思いました。僕が高校生で体験した大地震も、大昔あったのかな……。

そして、百年とか千年先はどんな未来なんだろうと考えました。

滝桜は、黙って咲いていましたが、その姿は堂々として、晴れ晴れと優しく、誇らしげでした。いろんなことを許ゆるしてくれているようにも見えました。

男子I 震災は人々から多くのものを奪うばい、もう戻もどってこないものもたくさんあります。でも、同時にこの出来事が私たちに与えてくれたものもきつとあるはずですよ。

それを信じて、ほんの少しずつですが、皆さんに元気な福島を見せられる日が来るよう、歩んでいきたいと思っています。

女子I すごく水がきれいで、空気もきれいで、海も湖も。

女子J 私のおばあちゃんの田んぼも畑も自然も、とつてもきれいです。

女子K 私は、福島が大好きです。福島の温かい人達も、福島の方言も……。

女子L 笑顔も。

女子M 素敵すてきだばい？ 福島！

女子N いつか私がおとなになって、福島を離れたとしても、絶対海や田舎いなかへ遊びに来ます。福島に来てください。今、すごく警戒けいかいされているけど、私たちは福島に住んでいます。ぜひ来てください。

男子K 福島に恩返しおんがえをする日が来た。

男子L 福島の桃はうめえぞ！

女子O 不安な時でも。苦しい時でも。

女子Q 震災にみまわれた時でも。

女子R (全員で) まわりには仲間がいる！

男子M 小さな力でも、たくさん集まれば大きな力になる。

〈フルオーケストラ+合唱『今』〉

〈「桜の精たちのダンス」が終わり、桃子が歩み出る〉

桃子 福島に生まれて、福島で育って、福島で働いて、

福島で結婚して、福島で子供を産んで、

福島で子供を育てて、福島で孫まきを見て、

福島でひ孫ひまごを見て、福島で最期さいごを過ごす。

それが私の夢なのです。

あなたが福島を大好きになれば幸せです。



庄助

不安な日々が続き、
なかなか前へ進めない、何も出来ない苛立ちもある。

それでも、一歩ずつでも、

少しずつでも、前へ進みたい。

大きな一歩じゃなくてもいいから……。小さな小さな一歩でもいいから、

勇気を出して踏み出そう。

俺達には支えてくれる仲間がたくさんいる。

共に手を取り合い、今を精一杯生きて、

素敵な未来を必ずつくるんだ。

やまない雨はない。明けない夜はない。

平和なときには気づけなかった

「本当に大切なもの」。

俺にとっては兄弟でした。

あなたにとっては、誰ですか。

気づけましたか。

今、気づくことが出来たその気持を絶対に、

絶対に忘れないでください。

〈合唱+オーケストラ『前へ』作詞/作曲 佐藤賢太郎〉

【フィナーレ】

〈応援団によるエール 、『上を向いて歩こう』 永六輔作詞/中村八大作曲

『ふくしま総文イメーション』 『思うがままに』 菅野友里江作詞/相楽純作曲

—幕—

※構成劇「ふくしまからのメッセージ」より



もう一人の八重

日本のマザーテレサ「井深八重」



井深八重は一八九七（明治三十）年に会津藩家老の流れをもつ名門一家に生まれました。幼少期を東京で過ごした後、京都で学び、卒業後は長崎で英語の教員として働いていました。ところが、二十二歳頃、身体に赤い発疹が現れ、心配した親戚が医者所に連れていくと、八重は「らい病」の疑いがあると診断されました。そのため、八重は病名も行き先も教えられないまま、伯母たちに連れられて、静岡県御殿場市にある神山復生病院に來ました。

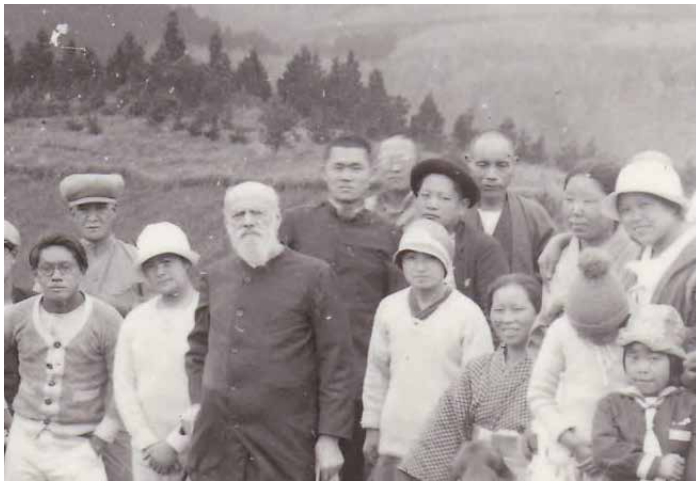
七月初めのどこまでも続く梅雨の曇り空が、そのまま八重の気持ちのようでした。衣類と生活道具の入った小さな荷物を抱え、「一体どこに行くのだろう。」と思いつながら、立ち並ぶ建物と木立の中を歩いていました。ほどなく一軒の洋館に到着し、部屋に通されると、そこには司祭服を着た白い髭の老人が静かに座っていました。その人が、ドルワル・ド・レーゼー院長でした。早速、院長と伯母たちが話を始めましたが、何度も出てくる「らい病」という病名が、大きな衝撃となって八重を襲いました。八重は、病院に隔離されるのです。いろいろな思いが脳裏を駆け巡り、八重はその場に茫然と立ち尽くしました。

① 八重は井深彦三郎とテイの長女として生まれた。父親の彦三郎は軍政顧問として活躍し、祖父の宅右衛門は会津藩の番頭で日新館学校奉行を務めていた。伯父に当たる井深梶之助は明治学院（現明治学院大学）の第二代総理で、八重が幼い頃両親が離婚し八重の面倒をみるのができなかったため、この伯父に預けられた。

② 一八九九（明治二十二）年創立。日本最初のハンセン病療養所であり、日本の公立のハンセン病療養所より二十年早く設立された。もととは一八七三（明治六）年にフランス人宣教師のテストウイド神父が布教中に道すがら出会った悲惨な状況下にあったハンセン病患者を救済するために保護したことに始まる。静岡県御殿場市神山にあるこの神山復生病院は、創立以来百二十年以上続いて

「らい病」は、現在は「ハンセン病」^③と呼ばれ、日本で古くから知られてきた病気です。今では、この病気は感染症であり、感染力も非常に弱く、早期に発見すれば治療^{ちゆ}することが分かっています。しかし、以前はよく効く薬もなく、感染すると末梢^{まつしやう}神経と皮膚が菌におかされるため、顔の皮膚や骨が腐り、盲目になったり、頭髮が抜けたりして、男女の区別さえつかなくなる患者もいました。そのため、当時、らい病は不治の病で、恐ろしい伝染病と見なされ、患者は不当に差別されていました。また、患者本人だけでなく、その家族も同様に差別されることが多かったため、家族は患者がいることを周囲に隠そうとして、死ぬまで家の離れに隔離したり、患者自身が家を出て、そのまま外で死んでしまったりすることが数多くありました。

名門の家かららい病の患者が出たと知られたら、親や親戚に迷惑がかかります。八重は、過去を一切断ち切るという慣例に従い、「井深八重」の名を捨てて、「堀清子」^{ほりきよこ}と名乗るようになりました。しかし、名前を変えても気持ちは変わりませんでした。毎晩涙が止まらず、絶望感から自ら命を断とうと考えたことも一度や二度ではありませんでした。「八重さん、今どちらにいらっしやるのですか。急に行方が分からなくなり、皆心配しております。」転送されてきた友人や教え子からの手紙を何



中央左がレゼー院長、中央右が八重

③ 一八七三年にノルウェー人医師のアルマウエル・ハンセンが病原菌を発見したことによる。
今では「らい病」と言う言葉は使われない。本文中でも最小限の記載に努めた。

度も読み返すと、どうしようもなく涙があふれてくるのでした。

ドルワル・ド・レゼー院長は、当時七十歳の高齢でした。フランス貴族出身のカトリック司祭でありながら、日本という異国の地で、献身的に患者に尽くしていました。当時、この病院には看護婦（現在の看護師）はおらず、資金の援助も少ない状態でしたが、院長は一人で治療を行い、時には水を求めて慣れない井戸掘りさえしていました。

ある日、病院の中庭を散歩していた八重は、ふと院長の様子が目に入りました。院長は、顔や手が赤く腫れて膿んでいる患者たちに、病気を恐れることもなく素手で手当てをしているのです。そして、患者一人一人に笑顔で、冗談を交えて話しかけ、患者の気持ちを和ませていました。

「希望をもてないはずの患者たちが、院長のおかげであんなに楽しそうに笑っている。」
八重はしばらくその光景を見つめていました。

信仰の故とは云いながら、故国を遠く、風俗習慣すべて異なるこの見知らぬ国へ渡り、このような病者をわが子と呼び、御自身もその親ともなつて尽して下さるそれらの偉業に対し、日本人としてだまつていてよいのだろうか、私はしみじみと考えました。

〔道を来て〕井深八重より抜粋、『人間の碑——井深八重への誘い——』井深八重顕彰記念会

それから間もなく、八重はレゼー院長を助けて重症患者の看護を始めました。窓ごしに空を見上げると、厚い雲の間からひとすじの光が射すのが見えました。

やがて三年が過ぎましたが、八重の症状は悪くなるどころか、少しずつ良くなっていったのです。そして再び検査を受けたところ、「らいにあらず」という診断が下されたのでした。三年前の診断は誤診だったので。院長も八重も、とても喜びました。しかし、八重は、「もし許されるのであれば、ここに留まり、院長のお手伝いをして病院のために働きたいのです。」

と申し出ました。再び教師として働くという選択肢や、院長から提案された、院長の故郷のフランスに移住するという選択肢は八重の心の中にはありませんでした。レゼー院長は、八重の希望を喜んで受け入れました。

八重は看護婦になることを決心しました。そして、看護学校で免許を取り、病院唯一の看護婦として働き始めた時には、二十六歳になっていました。患者は六十人くらいいましたが、その一人一人の患部を洗い、軟膏を塗り、包帯を巻いて皮膚の手当てをします。他にも、炊事や食事の世話、かさぶたや膿の付いた包帯や衣服の洗濯、病院の経理や寄付金を集



洗濯風景（正面を向いている人物が八重）

めることなど、あらゆる仕事を行いました。自ら選んだ看護婦の道とはいえ、あまりの重労働に、病院から逃げたくなることもありました。それでも、愚痴をこぼしたり、弱音を吐いたりせず、「一度休んだら癖になる。だから怠けてはだめだ。」「私は侍の子だから。」と何度も自分に言い聞かせ、辛い時期を乗り越えました。

患者たちも、病状に応じて、水汲み、畑仕事、精米、薪割り、建物の補修、裁縫や洗濯、餅つきやそば打ちなど、病院の自給自足を目ざして協力しながらよく働きました。そして、時にはピクニック、野球やテニス、音楽や芝居などを行い、お互いを楽しませながら、病院を、そして自分自身を支え続けました。

井深八重は聖書にある「一粒の麦」^④という言葉が好きだったといわれています。一粒の麦は、そのままではただの一粒にすぎませんが、地面に落ちればそこから豊かな実を結んでいきます。時には優しく、時には厳しく患者に接し、まさに病院の「一粒の麦」として、八重は六十五年間にわたり、患者の救済に自身の生涯を捧げました。

「母にもまさる母」と呼ばれ、多くの患者たちや看護婦たちに慕われてきた八重は、長年の功績が高く評価され、一九五九（昭和三十四）年にローマ教皇であるヨハネ二十三世から聖十字勲章が、一九六一（昭和三十六）年には国際赤十字社から看護婦の最高の名誉であるフローレンス・ナイチンゲール記章が贈られました。日本においても、黄綬褒章を受賞し、宝冠章勲五等にも叙せられました。また、一九七五（昭和五十）年には、アメリカの週刊誌『TIME（タイム）』に「マザーテレサに続く日本の天使」と紹介されました。

④ ヨハネによる福音書第十二章二十四節、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」より。

一九八九（平成元）年五月十五日、八重は「お世話になりました。神様の待っておられるよいところに行きます。喜んで……。」と短く語り、九十二年の生涯を静かに終えました。折しも翌日は、こうやまかくせい神山復生病院の創立百周年にあたり、式典に訪れた多くの人々が、思いがけず八重との別れを惜しんだといえます。

〔教材作成委員会〕作成

（写真提供 神山復生病院）

私の明日^{あした}

明日香^{あすか}は四月から高校三年生だ。大学進学を目ざしていた。しかし、震災・原発事故以来、受験生とは程^{ほど}遠い生活をしてきた。避難所生活も一か月を超えようとしている。明日香の村が福島第一原子力発電所から三十キロメートル圏内に入っていて、全村避難という事態になっていたからだ。

避難所に置かれたテレビは、震災と原発事故に関するニュースばかり流している。正直、もううんざりだった。しかし、明日香は、あるニュースにくぎ付けになった。ニュースキャスターが「福島では、農作物が次々と出荷制限^①されている。」と言ったからだ。せっかく作った野菜が出荷できない。私たちの生活はどうなってしまうのだろう。明日香の家も、稲作と畑作をしてきた農家だった。

祖母は避難所で生活する間、田んぼや畑のことを一切口にしなかった。このときもいっしょにニュースを見ていたのに、何も言わなかった。

「体を動かさなくなったから、太ったわあ。何もすることがないからねえ。」
こうぼやいて祖母は笑っていた。こんなときでも笑顔を絶やさない。いちばんつらいのは祖母のはずなのに、いつもと同じ朗らかな祖母だった。

振り返ると、母と目が合った。(ああ、母も同じことを感じている。)と明日香は思った。

明日香はおばあちゃん子で、子どもの頃から、祖母が米や野菜を作っている姿をよく見ていた。明日香や弟の拓也^{たくや}が「これ、おいしいね。」と言って、夢中で野菜を食べているそばで、祖母はとても嬉しそうに

① 農産品を市場に出ないようにすること。

ここにこと笑うのだ。明日香は、いつの頃からか、「私もおばあちゃんみたいに自分で野菜を作ってみんなに
おいしいって言ってもらえたらいいなあ。」と思うようになっていた。

明日香は、小学校の頃から家に帰ると農作業の手伝いをしていた。稲の種まき、田植え、稲刈り、はせ掛^②
け、葉たばこの移植^④・補植^⑤などの手伝いである。葉たばこの移植のときは、近所の人が手伝ってくれるのに
交じって明日香も祖母といっしょに作業をした。明日香がビニールシートの一つ一つに穴をあけ、そこに祖
母が苗を入れていく。二人三脚の作業だ。

「明日香は手際がいいねえ。私より上手だわ。」

祖母はお手伝いの人たちにそう言って笑った。農作業の合間にたわいのない話をするとき、祖母は本当に楽
しそだった。

「おばあちゃん、私、おばあちゃんみたいに農家をやりたい。」

「明日香、農家だけはやめておきなさい。」

明日香は、祖母の言葉に驚いた。

「明日香の気持ちは嬉しいけれど、農家は苦労が多いんだよ。雨の日も雪の日も、外に出て働かなくちゃな
らない。お前には勧めたくないねえ。」

庭の向こうに青々と広がる田んぼを見ながらこう話す祖母は、やはり笑顔だった。

「私もいろいろ考えたんだよ。獣医さんとか、薬剤師とか。だけど、やっぱり農家がいいって思ったの。拓
也より、私の方が農業が好きなんだから、私家が継いだ方がいいんだよ。ぜったい。」

中学生になっても明日香の農業への憧れ^{あこが}は変わらなかった。祖母は、農家を取り巻く社会の厳しい現状を
話してくれた。明日香は、祖母の話で初めて農業を仕事にするのは、そんなに簡単ではないことを知った。

② 刈り取った稲を自
然乾燥するために木
や竹を使って干すこ
と。地方によって「は
せ掛け」「おだ掛け」
等さまざまな呼び方
をする。



はせ掛け

③ 「たばこ」の原料
となるタバコ属の植
物、または、その葉
のこと。

④ 播種箱^{はしほび}で育ててき
た苗をポット等に植
え替えたり、苗を畑
やコンテナなどに植
え付けたりするこ
と。



たばこの苗の移植

写真提供・福島県農業
総合センター（旧福島
県たばこ試験場）

⑤ 植樹・造林等で、
苗木が枯れてできた
空地に、再び苗木を
植えること。

両親も、明日香が農家になるのには反対だった。しかし、高校生になっても農業に関わる仕事をすると言
い張る明日香に負けて、農学を学ぶ道に進むことは認めてくれた。(稲の良い育て方とかおいしい野菜の作
り方とか勉強するんだ。そうしたら家族にも村にも役に立つだろう。)そう思うと胸がわくわくした。祖母は、
そんな明日香の夢を、やはり笑顔で聞くのだった。明日香は高校二年になると、農学部へ進学するために理
系クラスに入った。この頃から明日香はバイオテクノロジーに興味^わが湧いていた。
そんなとき、あの震災と原発事故が起きたのだ。

原発事故の後、福島の農業の状況は大きく変わってしまった。この状況の中で大学に進学して農学を学ぶ
道を選んでいいのだろうか。明日香は、初めて自分の進路に対して悩み始めた。原発事故で村での農業はで
きなくなった。田んぼも畑も荒れるままだった。少しずつ除染^⑥は進められているが、除染で表土をはぎ取っ
てしまうと、土を耕し、肥料を入れ、雑草を取り、丹精込めて作り上げてきた農地はなくなってしまふ。つ
まり、農地にする以前の状態に戻ってしまうのだ。それをもう一度農地にするのは大変な作業だ。今、祖父
母は大切にしてきた農家としての全てを失って、じっと耐えている。

明日香は、祖父母に、もう一度私たちの村で元のように働くことができるようにしてあげたいと思った。
「私、やっぱり大学で農学を勉強したい。村でもう一度農業ができるようになる方法を見つけないか。除染し
た後の土地をできるだけ早く農地に戻せるようになる方法を。」
もともと明日香が農学を学ぶことを賛成していなかった両親が、初めて明日香の話聞いてくれた。

今、両親と祖父母は仮設住宅で暮らしている。村は少しずつ除染が進められているようだ。だが、まだ村

⑥ 放射性物質や放射
性物質が付着したも
のを除去し、人が生
活している空間の放
射線量を下げること
をいう。その方法は、
さまざまである。

へ帰ることはできない。それはもっと先になるだろう。

明日香は福島を離れて大学で農学を学んでいる。おいしい米や野菜の作り方を学びたいとぼんやりと考えていた中学生や高校生の頃とは違う。やるべきことは決まっている。除染した土地を少しでも早く農地に戻し、活用できるようにする方法を研究することだ。レポートや実験、実習も大変だ。毎日が忙しい。だが、この毎日をつらいとは思ってはいない。今日の先にあのときとは違う祖母の笑顔があると思うからだ。

（「教材作成委員会」作成）



道 みち

標 しるべ

真一しんいちが視覚に違和感をおぼえたのは、中学校の卓球部で練習をしているときだった。それまでは普通に返球できていたのに球の軌道が見えにくくなった。眼科に受診をして緑内障であることを告げられた。手術をしたが視力は改善することなく、それでも普通高校に進学した。

病状は変わらなかった。左眼の視力がほとんど無いことを隠して通学していた。体育の授業でバスケットボールをよけ切れずに、「どうした、真一。ちゃんとボール見ているのか。」と言われたり、教科書に顔を近づけるために、無意識に姿勢が悪くなったりした。

「真一はいいよな、出席番号最後で。窓際まじりかわだし一番後ろの席だし。」

真一の心の内は誰も知らない。教室の後ろの隅からでは、黒板の文字は全く見えないのだ。「前の席を希望する人は申し出るように。」と先生は言っていたけれど、片方の目が見えないことは誰にも知られなくなかった。しかし、何とか自力で予習して、必死で聞き取った授業の内容を復習することにも限界があった。そんな恐怖心から少しは解放されると思うと、明日から始まる夏休みは真一にとって何よりの救いだだった。

「ただいま。」

「おかえり、暑かったでしょう。今日はどうだった。」

「べつに。」

そう言ってテーブルの上にかばんを投げ出し、リビングのソファに寝転んだ。

母親の「今日はどうだった。」には、「目が見えないことで友達にからかわれたりしなかったか。」とか「学

校への行き帰りの路上で危険な目に遭わなかったか。」とききたいのだということを、真一はよく分かっている。テレビをつけようとりモコンに手を伸ばしたとき、テーブルにある一枚のちらしに気がついた。手に取って間近に見ると、それはおそらく母親が置いたのであろう富士登山の募集ちらしだった。そこには大きな字で『あきらめず一步一步登っていけば、必ず夢はかないます。日本一の富士山に一緒に登ってみませんか。』と書いてあった。部活動をしていない真一に、母親は、夏休みのキャンプや野外体験などのちらしを持ってきては、真一に参加するよう勧めていたのだった。

「こんなの絶対行かねえからな。」

真一は台所の母親には聞こえない声で言い捨てた。

しかし、夜、布団に入ってから、「日本一の富士山」という文字が真一の頭から離れなかった。(行きたかったって人の迷惑になるだけじゃないか。山登りに挑戦したからって、どうなるっていうんだ。) そう思う一方で、真一はキャンプや屋外体験とは違う魅力を富士登山に感じていた。自分自身を試してみたい、今の自分を変えたいという思いは今までもあったし、今でも強く願っていることだ。日本一の山に登ったら何かが変わるかもしれない。そう思うと目が覚めて眠れなかった。

次の日、朝ご飯の準備をしている母親に声をかけた。

「あのさあ、富士山に登ってみようかなあ。」

「あら、どうしっちゃったの。」



母親は、笑顔で振り向いた。

富士登山への挑戦

和神 真一

「一緒に富士山を登ってみませんか。」

私は、最初この話を持ちかけられた時は全く興味が沸かず、むしろ嫌でした。なぜなら、他の人に迷惑をかけないか、視野が狭く見え難い自分が無事に富士山の険しい山道を登れるか、視覚障がい者の私が、健常者の高校生の中に混ざっていたら、変に思われないう不安があったからです。

登山の前にオリエンテーションがありました。スタッフの中に視覚障がい者の山登りをサポートしてくださる方たちがいて、その人たちと一緒に登ることになりました。安全に登ることができると安心し、不安はひとつ解消されました。しかし、まだ別の不安が残ったままです。それは何と参加する高校生は、六十人いたのです。私は、てっきり十人か二十人程度かなと思いついていたので、本当にこの人たちの中でうまくやっていけるのか、と逆に不安は大きくなりました。

いよいよ二泊三日の富士登山に出発する日がやってきました。一日目の夜、一人不安を抱えたまま部屋にいたら、とある男子たちが、何とこの視覚障がい者である私を、

「一緒にトランプやろうぜ。」

と誘いに来てくれたのです。学校のことなど他愛のない話をしていくうちに、抱えていた不安が薄らいでゆくのがわかり、小さなことにこだわっていた自分がバカらしく思えてきて、共通する話題で笑いが止まりませんでした。視覚に障がいがあるからといって、変に思われることはなかったのです。

二日目は、前夜の事もあり、自然と心が弾んでいました。ご来光を見るために、朝早く起きて登り始めたのですが……。生憎あいにくの雨で岩場は滑りやすく、視界の利かない私は「この先段差」とか「頭の上気をつけて」と教えてもらっても、ふらついたり、転んだりの連続でした。雨は降り続き、険しい山道を登っても登っても、辺り一面雲に覆われていて、ご来光どころかずと真っ白のままでした。結局、頂上まで周りの景色は変わらず、雲の中を泳いでいるようでした。本当に自分たちは富士山に登頂したのかと、一緒に登った人たちと笑い合いながらも、今までに味わったことの無い達成感がありました。

下山してからの毎日は、これまでの日常とは違った景色が広がって見えるようになりました。まるで心にかかっていた霧が晴れたように。

障があるからといって自分の世界だけにとらわれず、もっと広い視野で周りを見てみる事が大切だなと感じるようになりました。たとえiPS細胞①による網膜の再生より私の眼が光を失う方が早くとも、何にでも挑戦し、人生の山坂を踏破してみせます。

(平成二十五年 東北地区盲学校弁論大会出品作品)

(「教材作成委員会」作成)

① 人工多能性幹細胞。二〇〇六年に山中伸弥教授たちの研究グループが、世界で初めてマウスの細胞を用いてiPS細胞を作ることに成功した。

三十年後の桜

① NPO法人ハッピーロードネットは、双葉郡の子どもたちのために活動している団体である。道路沿いのごみ拾いをしたり、花を植えたりといろいろなボランティア活動をしている。その活動の中心にいるのが、広野町に住む専業主婦の西本由美子だ。西本は、自分の子どもが自立してから、地域の子どもたちのボランティア活動を推進するNPOの活動をしていた。その活動の一つとして、近くの高校生たちと海沿いを走る浜街道に桜の木を植える活動をしていた。西本は、ハッピーロードネットのメンバーと会うたびに、桜が咲き誇る世界一美しい浜街道にしようと話していた。



西本は震災当日、仙台での会議に出席する予定があった。しかし、その日の朝はそれまでに感じたことのない体のだるさに襲われ、会議をキャンセルしたのだ。もし仙台での会議に参加していたらと思うと凍りそうになった。津波があったあたりを車で通過していて大津波にのみ込まれていた可能性があった。西本は、自分の命がある、ありがたさを痛感していた。

しかし、東日本大震災による大津波は、西本たちが植えた桜の木とともに、その活動の中心だった高校生の咲子の命を奪ってしまった。咲子は当時、卒業後の進路も決まり、運転免許を取得しようとしている最中であつた。あの日、自動車教習所の送迎の車に乗っていたところを津波にのまれて、帰らぬ人となってしまうのだ。

咲子の死を知ったときに思った。

(この生かされた命を無駄にはいけない。)

① 「特定非営利活動促進法（NPO法）」により法人格を認証された民間非営利団体。

津波の犠牲になってしまった咲子は常々、

「ボランティアは人に感謝すること。やらせていただくものだから、人にやらされるのではなく、自ら進んでやるものなのよ。」

と後輩の中学生に教えていた。しかし、そんな咲子も西本と活動をいっしょに始めた頃は、学校の先生に無理矢理連れてこられて、しぶしぶやっていたのであった。その成長した咲子の命を、大津波は一瞬にして奪ってしまったのだ。

大震災と原発事故から一年が経った春に、西本は、避難先である仮設住宅のテレビ映像で富岡とみおかの夜ノ森よのもりの桜を見た。誰もいないところに静かに咲く桜の木々たちを見て、西本の目から涙が溢れていた。そして、そのとき、あの大津波にさらわれてしまった咲子への思いとともに、もう一度、「世界一美しい浜街道にしよう。」と思い立ったのだ。国道六号線沿いを満開の桜でいっぱいにしようかと決心したのだ。西本はハッピーロードネットのメンバーに自分の気持ちを打ち明けた。

「六号国道に桜並木を作ろう。世界に誇れる浜街道にしよう。」
メンバー全員が西本の言葉に頷うなずいた。避難生活を強いられているにもかかわらず、メンバー全員が協力を申し出たのだ。

必要なものは、数えたらきりがなかった。まずは資金がない。どうやって桜の苗木を調達するのか。誰が植えるのか。誰が管理して、誰が維持していくのか。西本は考えた。自分のような年配の者ではなく、三十年後も活動できる人にやってもらおう。そこで、地元の青年会議所のメンバーに相談してみた。西本の熱い願いは受け入れられ、青年会議所のメンバーも意気込んだ。浜通りはまどおりの各青年会議所へ連絡を入れ、賛同を得るまではさほど時間がかからなかった。しかし、問題は活動資金だった。

桜の苗木を国道六号線沿いの一九三キロメートルに植樹するとすると、少なくとも桜の苗木は二万本が必要となる。まずは、県の震災復興を担当する課に話を聞いてもらおうとした。将来の子どものための事業であることを熱く訴えたが、趣旨には賛同してもらえなかったもの、提示された額は、予算額の五分の一にも満た



なかった。

資金の準備と並行して、植樹する場所の許可を得る交渉も始めた。国道六号線沿いに十二メートル間隔で桜の木を植える許可を国土交通省に申請した。そして、同じ頃、資金のめどが立たないまま、この桜のプロジェクトの事業をマスコミの力を借りて全国へ発信することにした。五月の最初の交渉から始まり、何度も何度も行政に出向き、復興を担当している課だけではなく、聞いてくれそうな課を回り歩き、賛同を求めた。西本は、自分の中の思いを絞り出すように担当者に訴えた。粘り強く、時には涙ながらに、復興の意味と子どもたちの将来への希望を熱く訴え続けた。

「多感な子どもたちは、多くのものを失って、苦しい避難生活をしている。今ここで、大人たちが行動を起さなかったら、誰が子どもたちの三十年後を守ってやれるのですか。」



ついに十月、計画していた希望通りの予算額を支援してもらうことができた。西本は、ハッピーロードネットのスタッフたちと抱き合い、皆で涙した。国土交通省への申請も済み、世界一の桜の名所をめざす桜プロジェクトは、本格的に動き出すことになった。さらに西本は精力的に動く。県外や県内の市町村へ出向き、それぞれの市町村長に会い、桜プロジェクトの賛同を得ようと必死になって訴えた。さらに、企業からの賛同も得ようと奔走した。会津若松市を訪れたときのことだった。立ち寄った蚕養国神社で、なんと樹齢千年を数える「峰張桜」の後継木を一本頂いたので。千年に一度ともいわれるような大震災に千年生きる桜が見守るといって「ご縁」を感じずにはいられなかった。そして、この木を復興の基地であるJヴィレッジに植えることに



決めたのだ。さらに、しだれ桜で有名な三春町からは、三春滝桜の苗木を二本寄贈してもらった。その頃には、多くの企業からも賛同を得ることができ、植樹した後の桜の管理や維持費の準備も、徐々にではあるが整っていった。

震災から二年後、新地町を皮切りに、いわき市、南相馬市、榎葉町と浜通りの各地で、国道六号線沿いの桜の植樹がスタートした。翌月には、西本の地元である広野町での植樹も行われた。ハッピーロードネットのボランティア活動に参加していた地元の中学生たちも、避難しているいわき市から母親らと一緒に駆けつけた。

「おばちゃん、来たよ。」

聞いたことのある懐かしい声でした。西本の息子とその友人たちだった。

「みんな、どうやって来たの。」

西本の目には涙が溢れていた。息子と友人たちはハッピーロードネットのホームページを見て、東京から植樹にわざわざ駆けつけたのだった。

西本が忙しい合間を縫って協力をお願いし、賛同を得た企業の他に、個人の会員として桜のプロジェクトに賛同する人々の数も徐々に増えた。北海道から沖縄までの日本全国、年齢・性別を問わず幅広い世代にわたり復興を願う会員数は八千人を超えた。桜の苗木を植樹した人は、メッセージ入りのプレートに飾ることができた。

広野町での植樹に集まった子どもたちの言葉が、西本の耳に残っている。

「西本さん、三十年後、花が満開になるときに、自分の子どもと来るからね。」



〔教材作成委員会〕作成

野馬追に懸ける思い

福島県には地域に根差した多くの祭りや行事がある。福島市のわらじ祭り、二本松市の提灯祭り、会津地方の大俵引きなど、地域の人々の思いに支えられ、数百年の時を超え受け継がれている。

相馬地方にも古来より受け継がれている伝統行事がある。それが相馬野馬追だ。相馬氏の祖である平将門が、原野に放した野馬を捕える軍事訓練と捕えた馬を神前に奉納したことを由来としている行事で、一千年以上の歴史を持つ。相馬地方の平和と安寧を祈る神事であり、現在は国の重要無形民俗文化財となっている。野馬追が行われる初夏、町はまるで戦国時代にタイムスリップしたかのような。相馬野馬追が近づくと「夏が来た」と地域の人々は口をそろえる。

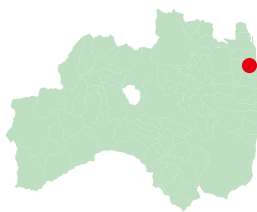
僕は、そんな南相馬市の中学生、駆だ。僕たち相馬地方の人々は、農耕で使う機会がなくなった今でも馬を愛し、家族同様に大切にしている。我が家はじいちゃん、父ちゃん、そして僕の親子三代で相馬野馬追に参加していて、もちろん家では馬を三頭飼っている。

じいちゃんは野馬追に出場し始めて六十年の大ベテラン。春になると、道具の手入れや馬の調子を見て、夏の陣に向けた準備を念入りに行う。それを見ると父ちゃんも



神旗争奪戦に備える騎馬武者たち

① 相馬野馬追は7月最終土曜日に行われている行事。初日は出陣式、宵乗り競馬、二日目はお行列、甲冑競馬、神旗争奪戦、三日目は野馬懸が行われる。



僕も、夏の足音が聞こえてきた気がしていた。

「おい、駆、朝だぞ、起きろ。」

朝は四時に起き、馬の世話をする。それが我が家の習慣だ。

「野馬追でがんばってもらわないとな。」

と意気込む勇壮な武士のような父ちゃんの横顔を見て、いくらなんでも毎日四時は辛いよなあ、と思いつつ、眠い目をこすりながら手伝いをする自分がいた。家の習慣だと自分に言い聞かせ、馬小屋の掃除、給餌を終え、乗馬練習に汗を流してから学校へ向かう。友達はず日見たテレビやゲームの話で盛り上がっている。僕にはゆっくりテレビを見ている余裕はない。適当に相槌を打ち、いかにも見ていたかのように話を合わせる。友達の話がうらやましい。

そんな僕には、親友の剛士がいる。剛士の家も小さいころから馬を飼っていて、クラスで唯一野馬追の話ができる友達だ。いろいろと相談し合えていつも心強い。

「僕の父ちゃん、朝早く起きて手伝って言うから辛くてさあ。」

「そうだよねえ、うちの父ちゃんも同じこと言うよ。でも野馬追のためだからしょうがないよねえ。楽しみななあ野馬追。本当に最高の祭りだよね。」

そう話をする剛士の顔はいつもキラキラしている。

「おめでとう、駆。春からは高校生だなあ。体も大きくなるし、^②装束を仕立て直さなきゃならなあ。」
じいちゃんは中学校の卒業式から帰ってきた僕にそう話しかけてくれた。

「……、うん。」

② 野馬追いで使う鎧兜や着物など。

その日の午後、東日本大震災が起きた。今までに経験したことのない大きな揺れに柱がめきめきと音を立てた。家具が倒れ、棚の物はすべてが床にちらばった。沿岸部では、巨大な津波が防風林や家を飲み込み、田んぼの真ん中にはいくつもの漁船が打ちあがっていた。この世の終わりのようだった。僕の家は、津波の被害はなかったものの、その後の原子力発電所の事故の影響を受けた。発電所から二十五キロの距離にあつたため、緊急時避難準備区域に指定され家族で避難することになったのだ。我が家で飼っていた馬は、父ちゃんの知り合いが経営している岩手県の牧場で預かってもらうことになった。剛士は、自宅が放射線量の高い計画的避難区域に指定され、南相馬を離れて神奈川県ひばりがはらの学校へと転校していった。

テレビのニュースが流れた。

『今年の相馬野馬追は、会場の南相馬市原町区の雲雀ヶ原祭場が福島第一原発から三十キロ圏内の緊急時避難準備区域に指定されているため、メイン行事の甲冑競馬かっちゅうけいはと神旗争奪戦しんきそうたっせんの実施の見送りを正式に決定しました。』

「俺たち、今年の野馬追は出られねえのか、こんなに続いた祭りで、こんなこと初めてだ。」
テレビを見ていたじいちゃんがそうつぶやいた。父ちゃんはとんだり悔しそうに涙を浮かべた。

静かな雲雀ヶ原祭場の夏が来た。

震災以降、朝早起きして馬の世話をすることもなくなった。馬の世話をするのがあんなに辛かったのに、



静かなメイン会場の雲雀ヶ原祭場



⑥ 高く打ち上げられた旗（御神旗）を勇壮に奪い合う行事。



⑤ 甲冑をつけて行う競馬。

③ 政府が住民に対していつでも屋内退避や避難が行えるように準備をしておくことを求めた区域。

④ 政府が住民に対して区域の指定から約一か月の間に避難のため立ち退くことを求めた地域。

急になんだかぼっかりと心に穴が開いたようなさみしい気持ちになった。家族が集まると決まって牧場に預けた馬の話になった。牧場の人には慣れたかな、えさはきちんと食べているかな、気候が変わって体調を崩していないかななど、馬のことが気になってしかたない。馬がうちの家族の一員だったと言うことを改めて感じた毎日だった。

九月に緊急時避難準備区域が解除になり、僕たち家族は南相馬の自宅に帰ってきた。そして、馬たちも岩手県いわたの牧場から帰ってきた。馬運車ばうんしゃからは我が家で飼っていた三頭の他に、もう一頭、馬が降りてきた。四頭目の馬、それはまさしく剛士が大切に育ててきた馬だった。半年ぶりに見る馬の目は、美しく透き通っていた。

「元気でよかった。」

父ちゃんはそう馬を抱き寄せて首をさすり、一生懸命ほんまに頬ほおを撫なでた。

「父ちゃん、僕、馬の世話頑張がんばるよ。」

翌年の夏、野馬追のまおが例年通り⑦の形で実施されることが決まった。そのことを剛士に伝えると、夏休みに入っ
て避難先から練習のために戻ってきた。乗馬練習や給餌を一緒にする中で、お互いの高校のこと、部活のこと、そして野馬追のことを夢中になって話し合った。

野馬追の日が来た。汗だくになりながら鎧よろいを身にまとい、馬の背に乗った。もちろん、じいちゃん、父ちゃんと並んだ。

「これ出陣！」

⑦ 原発二十キロ圏内である小高区の行事は一部行われないものがあつた。

法螺貝の合図で馬を進める。

行列が行く沿道には、たくさんの方の地元の人や観光客の姿があった。馬の背から見る郷里の景色はこんなにも広く、活気に溢れ、そして美しかったのか、改めて感じる瞬間だった。

雲雀ヶ原までの道中、剛士が語りかけてきた。

「駆が馬の世話を引き受けてくれたお蔭で、俺もこうやって参加することができたんだよ、ありがとな。」

僕は恥ずかしくなり、返事をすることはできなかったが、剛士の気持ちに応えようとにっこり笑った。

背中に付けた旗指物が風になびき、馬の蹄が響き渡る。

「雲雀ヶ原に向け進軍中！」

⑧軍者が叫び、馬が嘶くと、

「震災に負けず頑張れ！」

「野馬追、応援しとるぞ！」

とたくさんの方の拍手や歓声が飛び交った。

馬の背にまたがり、以前のように多くの地元の人たちと行進できることのがうれしさと同時に重みを感じていた。

雲雀ヶ原祭場地にはさらにたくさんの方の姿があった。甲冑競馬と神旗争奪戦は例年通りに行われて相馬の地に活気がよみがえった。これだけたくさんの方の馬が一堂に会する祭りは全国他にない。まさに、現代によ



整然とした騎馬武者の行列

⑧ 軍師、副軍師を補佐し、上司の命を受け実務を担当する役。

みがえった戦国絵巻そのものだ。

夏が近づいてきた。僕は今年、社会人になった。出勤前の馬の世話と練習は欠かせない。朝早くから町には蹄あしづひの音が軽快にこだましている。

「精が出るね、駆くん。」

と近所の人も声をかけてくれる。

今年もこの季節が来たか、と地域の人たちも喜んでいる。

「僕がこの町の、この伝統を守り抜いていく。あの震災があっても途絶えることなく守り抜いてきた野馬追とその誇りを僕が未来へ引き継いでいこう。」

そう心に誓い、握った手綱たづなに力を込めた。

〔教材作成委員会〕作成

二〇一一年三月十四日

私はかじかむ手に息を吹きかけ、何度も携帯電話の待ち受け画面の我が子の顔を見つめていた。八月に生まれたばかりの我が子。自分はどうすべきなのだろうか、思いはふりこのように揺れていた。

息子の名は陽太ようたといった。生後七ヶ月に達し、ようやくハイハイができるようになった。いつも愛くるしい笑顔を振りまいてくれる。私と妻にとってかけがえのない太陽のような存在だった。

老人介護施設で働いていた私は、東日本大震災後、先の見えない

混乱の中で多くの利用者を連れて、中通りにある体育館に避難してきていた。他の避難者との間にパーテーションもない広い体育館。多くの人々のざわめく声が、絶望にも似た空気とともに充滿していた。板張りにシートを敷いただけの空間にいと、もうすぐ四月だというのに寒さが足下あしもとを伝って体の芯しんまで入り込んでくる。寒さと睡魔で思考が働かない。もう三日間、ほとんど不眠不休の状態で働き続けていた。

施設の利用者は、食事の世話からおむつの交換まで、手を貸さなければ自分ではできない重度の要介護認定者がほとんどであった。三十名ほどの職員が随ずい行し、お年寄りの世話をしていたが、介護機器がないため、おむつ交換一つとっても、大変な労力が求められる。ストレスで、奇声を発したり、徘徊はいかいするお年寄りもいた。夜通し見守らなければならず、身体的にも精神的にも負担が増していった。しかし、いつまで続くか分からないこの避難生活の中でも、職員たちは、精一杯自分の任務に取り組んでいた。

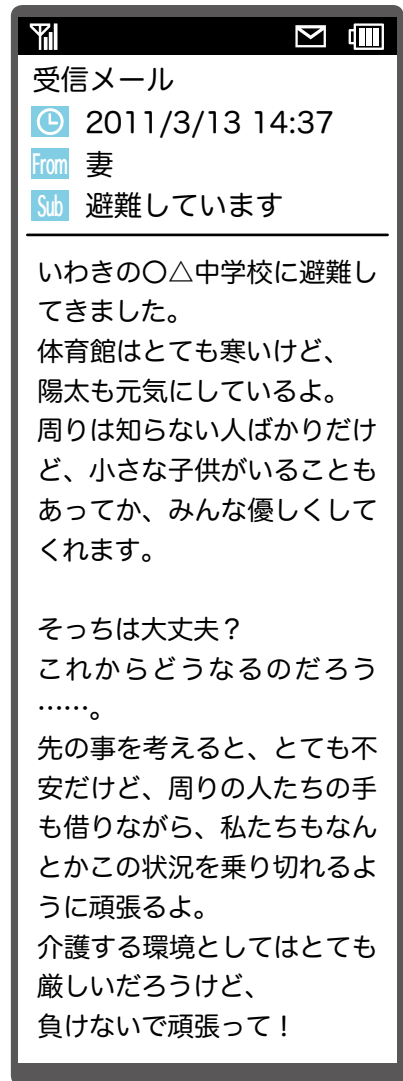
やっと妻からメールが届いた。この混乱のさなか、十分な安否確認ができずに心配していたが、無事にいわき市に避難したという。



① 寝たきりや痴呆等で、常時介護を必要とする状態になった場合に、介護サービスが受けられるよう、市町村で認められた者のこと。

② 人のお供として、付いていくこと。

③ どこともなく歩き回ること。ふらつくこと。



かつて同じ職場で働いていた妻は、私の置かれている状況を察してか、私を安心させるようなメールを送ってきた。しかし、^④気丈に振る舞っていても、きっと大変な思いをしているのだろう。そう思うといても立ってはいられず、今すぐにでも家族のもとに駆けつけたいという思いがわき上がってくる。しかし他の職員も皆、目に見えない放射能に恐れを抱きながら、家族のもとに駆けつけたいという思いと仕事への使命感との間^⑤で葛藤し、苦しんでいる。自分だけがここを離れるわけにはいかない。私は菌を食いしぼり、強くこぶしを握りしめた。

三月十七日

震災からほぼ一週間が経過した。徐々に全国から支援の手が届き始め、不足していた物資も足りるようにはなってきた。しかし、職員の心身にかかるストレスは減るどころか、増す一方だった。中には限界を超え、人目を気にすることなく泣いたり、物思いにふけったりする者が出始めた。いつまでこのような状況が続くのか。先の見えない暗闇^{くらやみ}の中を手探りで歩く時間が無限に続くような気がした。そんな中、一人また一人と家族のもとへ帰る職員が増えてきた。私は決してその人たちを責めることはできなかった。なぜなら、皆苦しみ、悩み抜いた末、出した結論なのである。そして、その多くの職員が、後ろ髪を引かれる思いや罪悪感を抱いたままで、職場を離れていったことも確かなのである。

④ 非常の際にも動転せず、平常心を保つこと。

⑤ 二つのもの間で心が揺れ動くこと。

依然^{いぜん}として、行き場のない多くの弱者が目の前に残されている事実には変わりがない。頭の片端^{かたはし}には幼い乳飲^{ちの}み子と妻の顔がちらついたが、私はぐつとこらえ、その姿を脳裏からかき消した。

三月十八日

今日も一人、職場を離れ、家族のもとに帰って行く職員が出た。日に日に職員が減り、一人にかかる負担はますます増していった。家族に会いたい。そんな思いが強くなってくる。そう思い始めると、いつもなら全く気にならない排泄物^{はいせつぶつ}の匂いまでもが神経にさわり、見るのもいやになってきた。

受信メール
2011/3/18 8:15
From 妻
Sub Re:
いつもは元気な陽太も自由に動き回れないからか、昨日の夜からぐずって泣いてばかりだよ……。周りの人の迷惑になるから、昨日からひたすらおんぶして外を歩き回ってる。全く満足に眠れず、気がおかしくなりそう。

受信メール
2011/3/18 13:12
From 妻
Sub 熱を出してしまいました
陽太が熱を出しちゃいました……。39度もの高熱で、すごく辛そうです。今やっと寝てくれたけど、私一人じゃすごく不安です。こんな状況で、子供の看病なんて無理だよ。なんかもう疲れた……。限界だよ……。いつまでこんな状況が続くの？いつになったら、迎えに来てくれるの？



妻から届くメールにも弱気な文面が目立つようになってきた。私は片手に携帯を握りしめ、ただその場に立ち尽くすことしかできなかった。

三月十九日

日増しに、家族に会いたいという思いが強くなっていく。全てがどうでもよくなってきていた。私一人が頑張ったところで、この状況が変わることなどない。どうして自分だけが、この苦勞をかぶる必要があるのだ。実際に、早々と持ち場を放棄した人もいるではないか。もう使命も責任も放棄して、家族のもとへ帰ろう。そして妻と陽太と一緒に過ごそう。その方がよっぽどいいに決まってる！

その時である。いつもにこにこと笑い、周りに愛想をふりまいてくれる施設でも人気者のおばあちゃんが、私の手を握り、ぼそっとつぶやいたのだ。

「めんどろみでぐれで、ありがどな。」

その瞬間、はっと我に返った。自分はなんてことを考えてしまったのだろう。目の前に私を頼りにしているたくさんのお年寄りがあるのに……。なんて自分は弱いのだろう。なんて薄情なのだろう。自分は何のためにこの仕事に就いたのだろう。自分が情けなくなった。

小さな頃からおじいちゃん子だった。共働きで、ほとんど家を空けている両親の代わりに、自分の面倒を見てくれたのが祖父だった。祖父と一緒に布団で眠るのが好きだった。祖父と手をつないで近所を散歩しながら、学校でのいろんな出来事を話すのも日課だった。自分の生活は、幼い頃から祖



父が中心だったのだ。祖父が自分に注いでくれた限りない愛情に感謝し、いつしか恩返しをしたいと思っていた。その思いが介護の道へと自分を向かわせたのだった。仕事を始めて七年になろうとしていたが、今では天職だとさえ思うほど毎日が楽しく、充実していた。仕事を通して、自らの存在意義を感じることも多くあったのではないか。ふっと原点に思いが戻り、自らを振り返った。

私は、こうつぶやいていた。

「大丈夫。俺はここにいつからな。」

私は寒さで冷たくなつたおばあちゃんのしわくちゃな手を包み込み、そつとさすつた。窓から春の訪れを告げる暖かな春の光が降り注ぎ始めていた。

五月八日

東北の地にもようやく春が訪れた。初夏を感じさせる暖かな日だった。妻と陽太は、先月のうちに、遠方より迎えに来た両親とともに郷里へと帰省していた。

全ての利用者の受け入れ先も決まり、施設は一時解体の運びとなった。ともに過ごしてきたお年寄りとの別れに、悲しみに胸が張り裂けそうだった。これからの生活が、幸せで満ちあふれたものになるように、祈らざるを得なかった。ともに戦ってきた職員との別れの時も迫っていた。これまでの苦勞をねぎらいながら、固い握手を交わした。涙で前が見えなかった。いつか施設を再び元の場所で開所しようと誓い合い、皆、それぞれの場所へと帰って行った。無我夢中の一ヶ月だったが、なぜか私の中には、最後まで自分の責任を果たせたという不思議な清々しさもあった。

真つ先に、妻と陽太のもとへと駆けつけた。

妻は、何も言わず、笑顔で私を迎え入れてくれた。そして涙ぐむ声でただ一言、

⑥ 天から命ぜられた職。そこから、その人に最も合った職業ということ。

「おかえりなさい。」

そうつぶやいた。私は妻の目をまっすぐに見つめ、はつきりとこう言った。

「苦勞をかけたね。本当にありがとう。」

妻は、手で顔を覆いながら、ただ黙ってうなずいた。

陽太は、いつの間にか伝い歩きができるようになっていた。陽太を抱き上げ、その柔らかな髪に触れた瞬間、頬を涙が伝った。次から次へととめどなく涙があふれて止まらなくなった。これまでの時間が走馬燈⑦のように頭を巡り、様々な思いが次から次へとあふれてきて、ぬぐってもぬぐっても涙が止まらなかった。

あれから四年が経った今、私は避難先で家族とともに生活し、やはり介護の仕事を続けている。たくさんのお年寄りの笑顔に囲まれ、とても充実した毎日を送っている。

あの時、お年寄りを残して職場を離れたいという思いを抱いた罪悪感は今でも消えない。私の心の中にしこりのように残っている。これからもずっと消えないだろう。でも、この一件を通して気付いたことこそが、私にとっての本当の幸せなのかもしれないと、今は思うのである。

〔教材作成委員会〕作成



⑦ 回転するにつれて、内側に貼った切り抜きの絵の影が、外枠に貼った紙や布に回りながら映って見えるようにしかけた灯籠のこと。「走馬燈のように」といった形で用い、次から次へと様々な映像が脳裏に現れては過ぎ去っていく様子を比喻する。



十代のしめくくり

人の波にもまれながら東京駅の改札を出る。行き交う人々の足取りが速い、都会の空気に圧倒あつじやうされる。明日は大学入学試験だ。これまで自分は精一杯がんばってきた。力強く足を前に踏み出した。

あの日は突然やってきた。高校一年生だった私は体育館で卓球部の活動に励んでいた。ものすごい揺れに恐怖が走ったことと、顧問の先生の「台の下に入りなさい。」の叫ぶような声だけが今も脳裏のうりに残っている。その後のことは、正直あまり思い出したくない。家を失い、学校を失い、そして友人達とも離ればなれになってしまった。

避難先を転々てんてんとし、中通りの高校に転入することになった。制服を失った私は、あの時のジャージ姿で新しい級友にあいさつをしていた。見慣れない制服。新しい教科書。違った先生。当たり前のことだが、学校が変われば、何もかもが変わってしまう。

心機一転しんきいつてんと自分に言い聞かせても、思い出すのは前の学校のことばかり。一年生も終わりに近づき、楽しい毎日だった。まさに高校生活を謳歌していた。二年生に進級したら、いよいよ進路の準備も本気で始めなければ、と思っていた。自分としては、漠然と学校の先生になりたい、と考えるだけで、それに向けての進学準備はまだまだこれから、という状況だった。そんな、楽しく、のんびりとした日々も、すっかり夢のようになっちゃった。

ふと、周囲のひそひそ話が気になるようになった。なかなか新しい環境に溶け込むことができなかった私

は、きっとそれを自分の噂話だと思ひ込み、一層級友と距離を置くようになった。そうして、少しずつ学校を休む日が増えていった。私の母も、震災以降、自分の娘に苦勞をかけてしまったと感じているらしく、「具合が悪かったら、無理しなくていいよ。」と声をかけてくれる。次第に学校から足が遠のいていった。

自宅で休んでいても、何をするというわけではない。母も私に気兼ねして、登校を勧めることもない。お互いに「このままではいけない。」と感じているはずなのに、何となくそれを言い出せない雰囲気があった。そんな私たちに、新しい学校の担任の田中先生は、こまめに連絡をくれた。私の体の具合を心配してくれたり、家族のようすを尋ねたりしてくれた。無理に登校を勧める言葉はなかった。田中先生が、あえてそこにふれないでいるのが私たちには十分分かっていった。私のことを気遣い、何度も連絡をくれた。

休みが二週間続いて、私は少しずつ焦りはじめてきた。母も同じだったと思う。私に「田中先生、毎日心配してくれているから、ちょっと先生の顔を見に行ってみたら。」と声をかけてきた。わたしは、「親孝行のつもりで行ってこようかな。」と、照れ隠しに答えて、学校へ足を運んだ。学校の門を入るときは、胸がどきどきした。

田中先生は、登校した私を笑顔で迎えてくれた。すぐに教室に入るのは大変だろうと、違う部屋で話すことになった。先生は、私からいろいろ聞いたのだと思ったけど、自分自身のことを話してくれた。先生は中学生の時、宮城^①県沖地震を経験したこと。そのとき、足の不自由な祖母と二人きりで自宅にいて、そ



① 一九七八年六月十二日に発生したマグニチュード七・四の地震。最大震度は仙台市などで震度五。死者二十八名、負傷者一千名余りの被害があった。

の祖母を背負って家の外に出ようとしたこと。近所の人たちが、中学生の自分をたくさん励ましてくれたこと、等々。先生は、わたしに気遣いながら、少しずつ話題を広げてくれた。そして、宮城県出身の先生が、なぜ福島県の高校で先生をしているのか、ということまで話が進んだ。震災以降、自分の将来に関わる話をする機会のなかった自分にとって、久しぶりに明るい話をする事ができた。そうして、しばらくは先生の授業の空いている時間に合わせて登校することになった。

そうして登校し始めてから一週間ほどした頃、田中先生と一緒に学校の図書館に行った。授業でグループごとの調べ学習をしているので、私にも参加してほしい、とのことである。久しぶりに同じクラスの生徒に会うのは、とても抵抗があった。その反面、今の自分の「何とかしなければ」という不安を和らげるチャンスかもしれない、という思いもあった。

ちょうど放課後の時間で、そこには同じクラスの幸枝さちえがいた。今思うと、先生が考えてくれていたのだと思うが、もちろん、そんなことは、先生も幸枝もおくびにも出さなかった。

先生は、私と幸枝にこう話した。

「今、授業でグループごとの調べ学習をしているの。よければ、あなたにも参加してほしい。幸枝さんのグループに入ってくれるかな。」

「幸枝さんがいいなら……。」

と私。そうして、私と幸枝は図書館で席を並べて調べ学習をすることになった。調べ学習の内容は、現代社会の「よりよく生きることを求めてく哲学と人間く『よく生きる』とは」という課題であった。過去



の偉人・哲学者の生き方について、それらの先人の残した言葉から調べていく、というものだ。幸枝は多くの書物を広げ、何かをしきりに書き留めていた。私は、図書館ということもあり、さて、どう話しかけたらよいかと考えていた。すると、

「これ、読んでみなよ。」

とてもぶっきらぼうな言い方で幸枝から渡された本は、昔のすぐれた思想家や学者の『名言集』だった。そこには、その時代に生きた人々が、日々の出来事とどう向かい合って、どのように数々の困難を乗り越えてきたのが、言葉に表れていた。その中に、こんな言葉があった。

——人間が生きるとは、常に、どんな状況でも、意味がある。——

オーストリアの心理学者 フランクル^②

ほんの数ヶ月前なら、特に気に留めなかったと思う。その言葉に感銘かんめいを受けている自分自身が意外な感じがした。先人の様々な名言に触れ、幸枝と「よりよく生きる」とはどんなことなのかを真剣に語り合った。とにかく、この調べ学習がきっかけで、私は少しずつ学校に足を向けることができるようになった。

田中先生には、時々じっくり話をする時間を作っていた。いつも先生は「しなくてはならない。」「してはだめだ。」というような話ではなく、穏やかな表情で私と話してくれた。ある日、先生との話のなかで、先生が教師を志望したきっかけの話があった。

② ヴィクトル・フランクル（一九〇五～一九九七）
オーストリアの精神医学者、心理学者。代表的著作に「夜と霧」がある。

田中先生は、高校時代、国語とくに現代国語（今の「現代文」）が苦手だった。漢字の読み書きと語句の意味さえ分かれば、あとはあんまり勉強しても変わらないと思っていた。ところが三年生の時に国語が新しい先生になり、文章の的確な読み取り方を学んだとのこと。ただぼんやりと文章を読んでいた先生にとって、それは大きな驚きだったらしい。その後その国語の先生と親しくなり、学校の先生という職業に興味をもつようになった。今でもその先生とは交流が続いているとのことである。

この話を田中先生とした頃から、私は将来の進路について少しずつ本気で考えるようになっていた。前の学校で漠然と考えていたことが、次第に身近な目標になりつつあった。担任の田中先生は、高校のその国語の先生に出会って、今の仕事に就いている。私は、その田中先生に出会って、影響を受けて、自分の将来の職業について考えるようになり、具体的な準備を始めるようになったのである。

それから半年後、三年生に進級。クラス替えはなく、幸枝とも同じクラスのままであった。

あるとき、幸枝と話していると、私が転入したばかりの頃の話題になった。幸枝によれば

「あの時、震災にあつて転入してきたあなたのことを、みんな心配していたのよ。どう話しかけていいか、みんな悩んでいたみたい。そうこうしているうち、学校を休んで来なくなっちゃうし。そんな時、担任の田中先生が、あなたを助けるために何とかしようってみんなに話をしてくれたの——。」

そうだったのか。



あの時の幸枝のぶつきらぼうさも、変に私に気を遣わせないための演技だったらしい。一年かかってようやく、私に対する周囲の気配りに気付くことができた――。

さあ、明日は受験だ。全力を尽くそう。今まで受けたたくさんさんの優しさに感謝し、自分の目標に向かって努力することが、今の自分にできる最善のことだ。

〔教材作成委員会〕作成

「がんばっぺな」

大地震が起きてから数日して、僕の高校進学が決まった。喜びよりも不安な気持ちの方が大きかった。

震災後、避難のために家族がばらばらに暮らすようになった人は多いと思う。しかし、僕の場合は違った。避難してきた祖父母が僕の家で同居することになったのだ。

祖父母との最初の同居は、原子力発電所近くから避難してきた知人の鈴木さん一家に、祖父宅を貸すためであった。その間に、祖父の人柄を知る出来事があった。

震災直後で様々な物資が不足している中、その鈴木さんから祖父に、「明日から仕事に行くことになったが、ガソリンがなくて、移動できない。」と連絡が入った。すぐに、祖父と父と僕はガソリンを購入するためにガソリンスタンドに向かい、車の列に数時間並んだ。僕たちの順番になり、僕は祖父と携帯用のタンク^①を持って車から降り、祖父が店員にタンクにガソリンを入れて欲しいとお願いをした。

「車でない人は、あちらの列に並んでください。」

「そんな。何時間も並んでいたんだから、お願いします。」

祖父は必死に店員に頼んだ。

「あちらに並んでいる人たちもいますので……。」

「今避難してこっちにいるんだけど、このガソリンを遠くで待っている人がいるんだ。頼みます。」

困った様子の店員に、それでも、祖父はかぶっていた帽子を脱ぎ、何度も頭を下げてお願いをした。

僕は、向こうに並んでいる人たちの視線が気になり、祖父の行為を恥ずかしく感じた。困っていた店員が

① 携行缶と呼ばれる、一時的なガソリンの携行に便利な容器。



店長に相談しに行ってくれた。その間に僕は、祖父の頭の上に少し積もった雪を払いながら言った。

「じいちゃん、僕がああの列に並ぶから、あきらめようよ。」

「今からあの列に並んだら、また何時間もかがつペな。早く届けてやりたいんだけどな。」

少し疲れた表情で祖父が言った。僕たちの様子を心配してか、車にガソリンを入れ終えた父が走って来た。

そこへ、店長がやって来た。

「避難されて来てるんですか。大変ですね。申し訳ありませんが、半分量でよければ、お入れしますよ。」

「いいです、いいです。それだけでも助かります。」

祖父の表情はパツと明るくなり、何度も頭を下げていた。五リノガソリンが入った軽いタンクを手にして

「良がったな。これだけあれば、鈴木さんたちも家まで帰れっペ。」

と人のために喜んでいた祖父の姿が、今も忘れられない。

そして、祖父は往復約二時間ほどかけて、鈴木さんにガソリンを届けた。鈴木さん一家は自宅へ戻る事になり、その数日後に、祖父母たちも自宅へと戻って行った。



祖父母との二度目の同居は、一度目から一カ月半が過ぎた頃だった。祖父母の家がある地域は、放射線量

が高いため、避難地域に指定されたのだ。

「これからは、長くお世話になります。いろいろご迷惑おかけしますが、よろしく頼みます。」

と祖父母は、僕ら家族に丁寧挨拶をし、再び僕たちの同居が始まった。僕は高校生になってから、自宅から学校まで自転車通学をしていたので、雨の日や朝早くの登校時などには祖父の車で送迎してもらった。

その年の夏休みのある日、僕は祖父母と一緒に祖

父母宅の草むしりに行った。祖父母宅が近付くと、

「この辺りの景色を見ると安心するなあ。放射能はここまで来ないと聞いていたのに、悔しいな。」

と祖父が言った。見渡すとあたり一面、田畑だったところに草が生い茂っていた。家に着いた時にも、

「五年か十年かしたら、ここに戻って来れっぺがら、それまで、家の手入れくらいは、やらねえどな。」

と祖父がつぶやいていた。僕はこの時、初めて祖父の複雑な思いを知った。

それから、一時間ほど僕は祖父と一緒に草むしりをし、祖母は家の中の掃除を行った。昼には、きれいになった庭を眺めながら用意してきたおにぎりを三人で食べた。祖母が握ってくれた普通の梅干し入りのおにぎり、最高においしく感じた。



草が生い茂った田畑の様子

秋の彼岸前には、祖父母宅の近くにある先祖代々の墓掃除を初めて手伝った。墓参りでは、避難している人たちが、久しぶりの再会を喜んでいる姿がこちらで見られた。墓のそばに咲いている彼岸花を見つけると祖父は、

「こうやって、墓参りに来たり、自宅に入ったりできんだから、おれたちは幸せだなあ。」

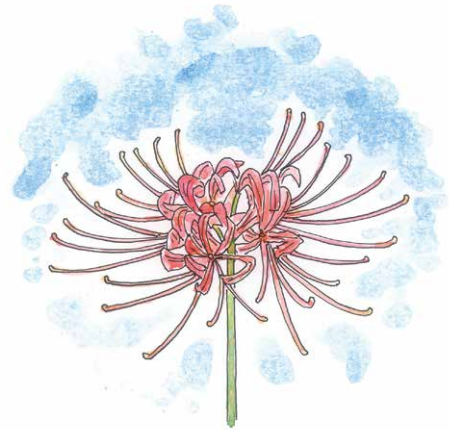
と祖母に話していた。

同居生活が一年過ぎると、お互いに気疲れや不自由さもあつたが、それぞれに生活のリズムができてきた。祖父母たちは近所の人とも仲良くなり、近所に畑を借りて、二人で野菜作りを始めていた。一方、僕は高校二年生になってすぐに、部活動内の人間関係で嫌なことがあり退部してしまった。他にも、教室代わりである体育館での授業に集中できず、成績が下がるばかりでイライラした生活を送っていた。

「おい、悠太^{ゆうた}。部活がないなら、畑でも手伝わないか。」

「ああ、でも、テストが近いから、今日は無理だな……。」

手伝う時間はあるのに、畑仕事を年寄りの仕事のように思っていた僕は、祖父からの誘いは勉強を理由にして断ってばかりいた。実際は、勉強をすることはなく、ただ家にいることもできずに遊びに出掛けることが多かった。採れた野菜を手にして喜んでいる祖父母たちを複雑な思いで見ていた。



僕は高校三年生になり、進路について悩んでいた。大震災後から大学で勉強して建築士になりたいと考えていたが、勉強もせず日々過ごしている僕に大学受験は無理だと思い始めた。夏休みの三者面談を目前にして、僕は別な進路を口にした。そばで聞いていた祖父が、

「悠太。あきらめんのは、まだ早いぞ。」

と、僕に言った。とっさに僕は、

「じいちゃんに何が分かんだよ。いろいろおせっかいなんだよ。」
と言ってしまった。

次の日、祖父に顔を合わせるのを避けて、いつもより早く家を出た。帰宅した時には、祖父の姿はなく代わりに父がいた。そして父から、祖父は今朝体調が悪くなり病院に行ったこと、そして癌がんが見つかり、そのまま検査入院することになったことを知らされた。あんなに優しい祖父が病気になるなんて……。僕は前日に祖父に言った言葉を後悔し、祖父が言った「あきらめんのは、まだ早いぞ。」という言葉を思い出した。僕は大学生になった姿を祖父に見せたいと強く思った。

七月下旬に、祖父は癌の手術を受けた。無事手術を終え、病室に戻って来た祖父は、

「みんな待っていたのか。ありがとうな。」

とみんなに笑顔を見せた。そして、僕を見て言った。

「悠太。じいちゃんは病気なんかに負けないぞ。」

「じいちゃん。ごめんよ。おれ、大学を受けるよ。」



祖父は笑顔を浮かべ、僕に手を差し出して言った。

「がんばっぺな」

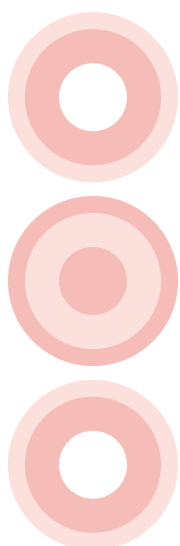
「うん。がんばっぺな。」

しばらくの間、僕たちは手を握ったままだった。

退院後、祖父が治療の副作用による痛みには、天気の良い日には、散歩する姿が見られた。祖父が頑張っている姿を見るたび、『僕も大学受験に負けないぞ。』と、目標に向かって勉強に励んだ。

センター試験の日、祖父は体調を崩して入院中だったが、僕は祖父を心配しながら、『がんばっぺな』と、受験会場へと向かった。

（「教材作成委員会」作成）



「モラル・エッセイ」コンテスト

作品集

カイロの温もり

福島県立郡山東高等学校

二年 星 結衣

私は列の中にいた。列は長く伸びて、いつ自分の順番がくるのかも分からなかった。三月の中旬、福島の春は、まだ遠かった。あの日やってきた大きな揺れ、そのために道路は寸断され、いつもなら簡単に手に入るものも列を作らないと手に入らないようになっていた。列を作ったところで、必ず手に入るとは限らないし、何が手に入るのかすら分からない。それでも、私たちはわずかな食料を手に入れるために列を作っていたのだ。中学を卒業したばかりの私も自分から進んでひとり列に並んでいた。その列は長く延びていたが誰も割り込もうとしないし、声を荒げる人もなかった。みんなが黙りこくって整然と列を作っていた。福島の三月はまだ寒い。厚着をし、手袋をしていたが寒さが身に堪えた。私の前に並んでいたのは、六十歳半ばくらいのおばあさんだった。お年寄りも頑張っているんだからと自分に言い聞かせるのだが、私は心細く不安でいっぱいだった。仕方がないと思いつつも涙

が流れて止まらない。その時、おばあさんがにこにこしながら振り返って私を見た。私はちよつと恥ずかしくなって涙をぬぐった。「まだまだ寒いね。」と言いながら、ポケットから何かを取り出すと「ほら。」と私に手渡した。それは、カイロだった。「いえ、大丈夫ですから……。」と返そうとする私を遮るように言った。「いいからポケットに入れておきなさい。ほら、温かいでしょ？」目を丸くしている私を見て、にこにこしながら、「おばあさんは続けた。日本人っていいよね。こんな時にこうやってじつと待ってられる。こんな国は世界中どこを探してもないんだよ。」私はうなずきながらカイロを握りしめた。「おばあさん、ありがとう。」笑顔が自然にこぼれるのを感じた。そのカイロは心までぽかぽかと温まるような気がしてぎゅっと握りしめた。

三月十日と三月十一日

福島県立福島商業高等学校

三年 渡辺 美友

震災当時、私の家は五人家族でした。いつもと同じように過ごしていたはずが、たった一瞬でなにもかもが崩れていきました。

三月十一日、この日は中学校の卒業式があり、後輩に会いに行きました。その後、久しぶりに友達と会い友達の家でご飯を食べ、テレビを見ていました。その時、激しい揺れと外で瓦が割れる音が聞こえました。ただ必死に友達にしがみついていたことを今でもはっきりと覚えています。すぐに家族が心配になり、電話をかけたけど繋がらなくて急いで家に帰りました。なんとか家族が生きていると分かり、安心しました。しかし、電気はつかない、水も出ない、そして余震で何回も揺れてますますこわくなりました。夜になり、祖父がデイサービスに行っていたので行くと、少しこわがった様子でした。それから何日も水と電気が使えない日々を送りました。ですが、震災があったからこそ大切なことも見つけられたし、家族の絆も深まりました。

あれから一年過ぎ、祖父は三月十日に亡くなりました。ちょうど祖父の姉の誕生日で、祖父の結婚記念日でした。亡くなった時刻は祖父の愛した妻の祖母と同じ時間。こんな偶然はなかなかないと思います。そしてたくさんの人が震災で亡くなっていったのに、祖父はこんなにも頑張ってくれました。

三月十日、そして三月十一日は決して忘れることのできない日です。被災した人が苦しんでいるのを見て、全国からたくさんの方の応援をいただきました。まだ復興してないとところもあり、まだまだ地震の爪痕は消えません。全国民が協力して元の平和な日本に戻していきたいと思っています。

この震災で、亡くなった方々の御冥福をお祈り申し上げます。私は、その方々の分まで一生懸命生きていこうと心に誓いました。

災害ボランティアを通じて感じたこと

福島県立本宮高等学校

三年 藤橋 咲耶

私が昨年三月十一日以降に感じたことは、人と人との絆です。それは家族であったり、地域の人であったり様々ですが、その中でも特にそれを強く感じた体験をしました。震災後に参加した災害ボランティアでのことです。

昨年の三月の終わり頃から四月の始め頃まで一週間程ボランティアに参加しました。ボランティアのことを知ったのはテレビで開成山で募集しているという情報を目にした時でした。私自身、何かできることはないかと思っていた時だったので、丁度良いと思い申し込みをしに行きました。活動には翌日から参加しました。当時、開成山陸上競技場は避難所となっており、原発周辺から避難してきていた人達も含めてかなりの数の避難者がいました。ボランティアの内容は郡山市内の避難所に送るための救援物資の仕分けがほとんどでした。様々な年代の人が参加をしているので、自然と作業が分担されていました。私は主に箱の中身の仕分けなどを行っていました。

重い荷物を運ぶ時もあったのですが、その時は大人の方が手伝ってくれて、とても助かっていました。浜通り地方から避難してきている人達も数人参加しており、誰かのために何かをしたいという思いは同じなのだ実感しました。

この経験を通して私が思ったことは、人のつながりの強さです。普段は道端ですれ違うだけのような人達が他人のために一つの場所に集まるのはすごいことだと思います。浜通り地方から避難してきていた人達も、話を聞いていた限り海沿いに住んでいたらしいので津波や原発事故などで大変な状況下で参加していたことはどんな理由であったにせよ純粹に敬意を表するに値すると思います。災害ボランティアはしょっちゅうある訳ではないし、あつてほしいものでもありません。けれど、みんなが大変な状況で地域の人がつながり協力していくのは、大切だと思いました。

私と家族を繋ぐ夕食時間

福島県立白河高等学校

一年 藤田 純佳

休日の夕方、我が家には「いただきます。」の音が響く。父、母、妹、そして私の四人、家族全員が食卓を囲む時間がやって来る。一週間の中でも、家族がみんな揃うのはこのときぐらいだ。大皿のおかずをみんなで取り合って食べる。このひとときを私は心待ちにしている。

今日の夕ご飯は何だろう。夕食前から台所に行き、「何か手伝うことある。」と尋ねるのが私の楽しみだ。普段は面倒くさがってろくに手伝いをしない私と妹も、このときは協力して皿を並べ、調味料を用意し、いつでも食べられるように、テーブルの上を準備する。食事が始まると、食べたいおかずの取りあいっこだ。でも、その合間にこの一週間にあったことを話すのは忘れない。「この間学校でね……。」「そういえばニュースで……。」何気ない会話が私たち四人を和ませる。「しゅゆはどこだっけ？」独り言のように呟く私に、妹はさっとしゅゆを手渡ししてくれる。口げんかをしたことなんて忘れ、夕食のあいだはみんなが笑顔だ。

仕事で忙しい父、仕事と家事もこなす母、部活を頑張

る妹。それぞれ悩み、考えることはあるだろうに、少なくともこの夕食のときだけは、みんなが楽しそうだ。私がお楽しみにする夕食、家族の顔を見て私はさらに嬉しく、もつとわくわくしてくる。

「幸せ」って何だろう？ お金があること、物をいっぱい持っていること……。いや、違う。「家族」がいることだ。家族がいれば何でも乗り越えられる。家族がいれば何だって楽しい。それを私に実感させてくれるのが、休日の夕食だった。家族と私をつなぐ食事の大切さ。この機会に家族で食事をする大切さを見直してみよう。そして、今週もまた私の大好きな、休日の夕食の時間がやって来る。

母の愛情

福島県立白河高等学校

一年 佐藤 彩

母の愛情を改めて感じる事ができる出来事がありました。

私が中学二年生の時、反抗期だった私は、両親から言われることに対していつも反抗し口答えばかりしていました。その日も、母に成績のことでお説教され私は口答えをし、そのままけんかになってしまいました。その後寝るまで母とは冷戦状態でした。私はいらいらしながらベッドに入り、眠りにつこうとしました。すると大切なことを思い出しました。そう。明日は、お弁当を持参しなくてはならない日だったので。私は母にこのことを言うか迷いましたが、いらいらしていたし、母と口をききたくなかったので、もうどうにでもなればいい、と投げ遣りになりそのまま寝てしまいました。次の日の朝、母もまだ怒っているのか話しかけてきません。私はお弁当のことを思い出し、どうしようかと悩んでいました。学校へ行く準備も済み、出かけようとした時、リビングのテーブルの上に、きちんと包まれたお弁当が一つ置いてあったのです。私はそのお弁当を見た瞬間、胸がいつ

ぱいになりました。お礼を言いたかったのですが母は既に仕事に行っており、言うことができませんでした。学校の昼食の時間、私はいつもよりもっと味わってお弁当を食べました。そして家に帰ったら必ず母にお礼を言う、そしてちゃんと謝ろうと強く思い、その後、母と仲直りすることができました。

私は、母はちゃんと私のことをみてくれているんだなと、とても嬉しく思いました。それなのに母にたてついて反抗していた自分がとてもはざしく思い、自分を見つめ直すことができました。

母の愛情は私にとって力の源であり、心の支えです。そんな愛情をくれる母に私ももっと恩返しをしたいと思っています。

おじいちゃん

福島県立白河高等学校

一年 菊地 郁恵

私は、四人兄弟の末っ子として、八人家族に生まれた。私の両親は共働きなため、幼い頃からずっと祖父母という時間の方が多かった。そのため、祖父母には可愛がられてきた。特に、祖父には、「めんこちゃん」という愛称で呼ばれてきた。福島県の方言の一つである「めんこい」からとったものである。祖父は、暇さえあれば近所の人とよく話す。話す事は決まって世間話と私の自慢話であった。

幼い私にとっては嬉しかったことだが、高校生になるにつれて、それが嫌になっていった。

また、家に帰るとすぐその日の出来事を聞かれ、帰りが少しでも遅いと、いつもは優しい祖父が、その時ばかりは怖いのである。しかし、部活を終え、疲れている私にとっていつの日からか、うっとうしいと感じ、無視するようになっていた。それでも朝になると祖父は笑顔で、学校へ行く私に一声かけてくれるのだが、無言で家を出るのがほとんどで、それが日常となっていた。

しかしある日、いつものように帰ると、祖父母の「お

かえり。」の声が聞こえないのだ。茶の間をのぞくと、そこに二人の姿はない。母から、祖父が体調をくずし検査をしていることを聞いた。祖父は過去に脳梗塞を二度患っているため、足に障害をもち、やや体が弱い。私は、恐怖と罪恶感で、その日は眠れなかった。

朝早くには祖母がいて、祖父が入院することを聞き、私はお見舞に行った。すると、そこで見る祖父の姿はすっかり病人で、私は悲しくなった。今日は自分から。と思いは笑顔で「おはよう。」と声をかけてみた。すると

「おじいちゃん、めんこちゃんの笑顔見ると嬉しくて、涙でちゃうなあ。」

祖父の言葉を聞くと、涙が溢れてしまった。

いつも大事に思ってくれてる人がいることがどれだけ幸せなのか、と痛感した。

コーヒー牛乳

福島県立白河高等学校

一年 大越 千誉

曾祖母が亡くなったのは、小学生の頃だった。祖父母は農業をしていて、朝早くから夕方まで家にいないし、両親は共働きだったし、四つ上の兄は部活で帰りが遅かった。夜には皆いるから、寂しいと感じる事はなかったけど、学校から帰ってきて、私にただいまと言うよりも先に「おかえり」と言ってくれるのは嬉しかった。曾祖母が大好きだった。冬には、バタバタと玄関に靴を脱ぎ捨て、廊下にランドセルをおろし、こたつに潜り込む私に温かい飲み物を出してくれた。牛乳を温めて、コーヒーと砂糖を溶かすだけなのに、心も身体も温まる。何でコーヒー牛乳なんだろうと思う日もあったし、今までの合計したら何杯飲んだかなと思う日もあった。もう、帰宅後に一杯飲むのは日課になっていた。しかし、ある日の朝方に曾祖母は、サイレンと共に病院に行ってしまった。それから一度も家に戻る事なく、冷たくなった。数日後のお通夜で母が桃を出すと言うので、皮むきを手伝っていた。何個かむき終わって、一息ついた時に話してくれた。「お嫁に来たばっかりの頃はよく、ひいばあち

やんにコーヒー牛乳作ってもらってたんだよ。私が牛乳嫌いだっただから、わざわざコーヒー溶かしてくれてたの。美味しかったのに、最近ずっと飲んでなかったな……」そう言った母は寂しそうだった。私は視界がぼやけていく中で、そうか、と黙っていた。コーヒーを牛乳に溶かし始めたのは母のためで、砂糖を溶かして甘くしてくれたのは、私のためだったのでないか。母は甘いものをそれ程好まないし、曾祖母はもういないから、この考えが当たっているかは分からないが、違っていても良いと思う。包み込むような優しさを持っている人だから、私の知らないところでも、たくさん私の事をしてくれていたはずだ。そんな曾祖母を尊敬してる。

十五年しか生きていない私には、知らない事や知らない人ばかりだ。出会いを大切に、友を気遣い、長生きをする予定である。

私の仏様

福島県立白河高等学校

一年 荒井 寿美

おじいちゃんは、何も話さない。必要な時以外は、ただ黙っている。そんな無愛想なおじいちゃんは、笑う時は大きな声で笑う。なんて表現すればいいか、私の中でのおじいちゃんは仏様だ。うんと小さい頃におじいちゃんのお父さんは亡くなった。家は大正寺というお寺である。兄弟は皆女だった為、大正寺の後継ぎはもう決まっていた。母から聞いたのだが、何も知らない状態から仏教の事を一から勉強したらしい。どれだけ努力をしていたのであろう。不思議なことに、バイオリンは弾けるしピアノもできる、家も建てられるし人を助けられるし、私はおじいちゃんが何かをできない所を一度も見たことがない。何でもできるおじいちゃんは、私の中で憧れの存在だ。ある日、私はおばあちゃんを泣かせた。おばあちゃんを作ったカレーがまずくて思わず

「何これ。おいしくない。もう食べないから。」

と冷たく言ってしまったのだ。すると普段は何も話さないおじいちゃんが

「残さず食べなれ。」

と言った。私はその時驚いて返事をする事はできなかったが、おじいちゃんのおばあちゃんに対する愛が伝わってきた。私はこの時、顔や表情には出さないけれど、行動でその人の愛情の深さは分かるんだと思った。

私はおじいちゃんを尊敬している。無口で何を考えているのかよく分からないけど、誰よりも人一倍努力した分、人間力があって強くて愛にあふれた人なんだと思う。私は将来大正寺を継ぐつもりだ。なぜなら、このおじいちゃんの魂を他人に渡したくないからだ。女で住職なんて……と思われるかもしれない。それでもかまわない。ただ私は、おじいちゃんのような人間になりたい。

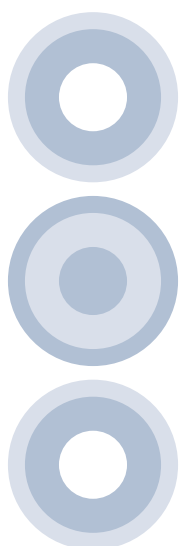
自分を福島県人であると意識したとき

福島県立いわき海星高等学校

三年 大和田 拓宏

私たちのクラス三十四名は、昨年の九月、乗船実習の外地寄港地活動として、ハワイで福島県人会九十周年を祝うため、クラス全員でじゃんがら念仏踊りを披露するという機会を得ました。私たちは、行事参加の日の朝早くから、最後の踊りの稽古をアロハタワーの下で行い、そのすぐ後にバスに乗って全員で会場であるアラモアナホテルに向かいました。会場には、ハワイ在住の福島県出身の方々、遠くはイギリスなど世界各国からの福島県出身の方々が参加していました。私にとって初めて体験する海外での式典です。校長先生、担任、副担任の先生方の緊張した面持ちの中でじゃんがら念仏踊りを披露しました。私の担当は、鐘です。緊張感で押しつぶされそうになりながら、乗船前から始まった稽古や、船の上で気分の悪い時もめげずに行った稽古をした自分を信じ、精いっぱいやろうと心に決めました。頭が真っ白になりながらも、一生懸命踊りました。終わってほっとして、やっと自分を取り戻したとき、会場を見回すと、立ち上がって拍手をしてきている方、近寄ってきて、涙を流

しながら何かを話している方がおられました。何を言っているかは、はっきりとはわかりませんが、感謝と、感謝して頂いているということはわかりました。いつもは、ばらばらである私たちのクラスが、この機会の一つにまとまって、ひたすら踊り、多くの方々に喜んでもらったことに驚きとうれしさを感じました。たぶんこの体験は、これからも忘れることはないと思います。この体験から、人に喜ばれることの大切さと、一人ではできないことでも皆で協力することで成し遂げることができるといふ自信を持ち、そして、なにより、同じ郷土愛を持つ福島県人会の方々に喜んでいただき、福島に生まれ育った自分自身が福島県人であることに喜びと誇りを持つことができました。



ふくしま道徳教育資料集【高等学校版】

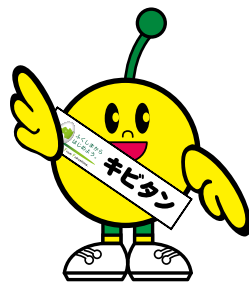
平成29年2月

福島県教育委員会

〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16

印刷 有限会社 吾妻印刷

道徳教育総合支援事業（文部科学省）により制作しました。



福島県教育委員会

<http://www.gimu.fks.ed.jp/> (義務教育課)

リサイクル適性 **(A)**

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。